



道

求

第
五
號

第
拾
壹
卷

求道第拾壹卷第五號目次

求道

◎現代思潮と信仰

講義

◎『教行信證』信卷(菩提心釋より)

近角常觀

第三席 菩提心釋

- 一 私共の菩提心
- 二 得度いが先立つ故頂けぬ
- 三 私
- の菩提心は斯くして皆な碎けてしまつた
- 四 信者の人
- が若し斯ういふことを思はぬか
- 五 自分より善くする
- 道では一歩も行かれぬ
- 六 お慈悲をすかして居る人
- 七 出来ぬとなるともう仕て見やうが無い
- 八 詮方つき
- てこしらえて居る信心
- 九 五劫の昔に佛かねて知召し
- 一〇 仕て見やうなき者でも無い
- 一一 お慈悲と私と
- どちらが勝つか
- 一二 若干の業をもちける身にてあり
- けるを
- 一三 甚難希有
- 一四 一念の時が命終の時
- 一五 二の難事

告白

◎求めずして呼び入れて頂いたお慈悲こそ

岡田 龜子

雜錄

◎信仰談話會應答抄録

講話

◎諸の如來と等し(承前)

近角常觀

時報

◎求道學舍第二求道會講話概況

◎第四回夏季求道會

每日曜午前九時

求道學舍

(木郷區森川町一帯地)

毎土曜午後二時

第一求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午後七時

第三求道會

(日本橋堀込町説教所)

『但し夏季中休講す』

求

道

第拾壹卷

第五號

現代思潮と信仰

○現代思潮なるものも種々ある様である、されど要するに消極的なるものと積極的なるものとの二種である、即ち人生を悲觀して如何なるものも眞實にあらずとなして否定するものと、他は人生を意義あるものとして、之に生命を見出し、之に永久の力を見出し、所謂常樂我淨を見出さんとするものである。

○佛教に於て常樂我淨は凡夫の四顛倒として、此人生を以て永久なるものとし、快樂なるものとし、我の存在擴張を欲し、清淨なる理想を見出さんとするが如きは、皆虛妄顛倒の見とするのである。現代思潮が人生を捕へて直に意義あるものとし、自我の擴張を主張するは實に此傾向である、而して事實問題に於ても現代社會なるものが物質主義に陥り、主我主義となり、奮闘主義となり、努力主義となる如きが皆是である。○此傾向を寛和せんが爲に起りたる新哲學新思想が精神的と

なり、主觀的となり、自己に新らしき理想を見出さんとして願る努力して、種々に試みられたれども、併要するに此人生に常樂我淨を見出さんとするに至りては一である、物質に常樂我淨を見出したるを一轉して、精神的に之を見出さんと試みたるの相違である。

○此の如く物質的に、若くは精神的に、人生其物の上に常樂我淨を見出さんとするの試みは、無効に畢るのである、徒勞に屬するのである、特に事實的に着々として破綻を見出し、一朝の快樂は榴花の開落の如く、一として惨めならざるはなく、精神上に於ても作られたる假想されたる信仰は、實際問題に逢着して悉く破壊されざるものはないのである。

○近時青年思想の間に實際問題に於て著しく動搖を示しつつあるのである、律法主義なる教權及道徳に於て満足を見出すことが出来なくなり、頻りに自覺實驗を叫ばれてあるが、是亦此人生其物の上に力を見出さんとする試に過ぎずして、是亦満足を見出すことが出来ぬことになる。

○かく人生其物の上に常樂我淨を見出さんとするの企は、結局駄目である上に、所謂積極的なるものは悉く落暴して消極的に趣かざるを得ぬのである。

○近代各方面に著しく勃興せる民主主義の傾向、社會主義の立場、教權律法に對する謀反、甚しきに至りては無秩序なる、無謀なる、極端なる破壊主義、自然主義、文藝思想に於ても、消極一面に陥りて、徒に失望、落膽、悲觀の聲を放つばかりて、結局何等の理想も目的もなき空漠なる態度を取るに終るものがある。

○凡夫の四顛倒たる常樂我淨が落暴して、此に人生の苦空無常無我の真相が實現し來るのである。併人生の苦空無常無我たることを悟るに非ずして、徒に苦空無常無我たることを悲觀し失望するのは、決して佛教の眞を得たるものではない。常樂我淨が凡夫の四顛倒たると同じく、徒に人生の苦空無常無我に泣くのも亦顛倒たるとは同一である。前者が常見とすれば、後者は斷見である、前者が有見ならば後者は空見である。

○此の如く、現代思想は積極的に消極的に遂に何等の力をも見出すことは出來ぬのである、往くことも還ることも出來ぬのである。自殺することも出來ず、生きることも出來ぬのである、二河白道の譬喩に於ける往くも死せん、還るも亦死せん、止るも亦死せん、一として死を免れずといふが其實況である、たとひ信仰問題に於ても、信仰を得るにも得られず、

なきがゆゑに、佛智不思議の御恵みは、我等が如何なる困難も、罪惡の底までも見通したまひて、他まで見捨てぬとの仰である、實に凡愚底下の私を、胸の底まで見透したまひて、不實極る私を他まで見捨てたまはぬ御眞實である、能の言は不堪に對するなり、疑心の人也、如何なる罪惡も救ひ能ふ、恵み能ふ、如何なる罪惡も引上げ能ふ、如何なる困難も救ひ能ふとの仰せてある、唯信し奉る外はない、地獄におちたりともさらに後悔すべからず、天上天下唯此佛智不思議ばかりである。

八月中傳道日割

七月廿四日ヨリ	廿八日マデ	高松市
八月一日ヨリ	五日マデ	山口縣秋吉
同 八日ヨリ	十日マデ	同 三 萬
同 十二日ヨリ	十四日マデ	同 萩 中
同 十六日ヨリ	十八日マデ	同 山口 中
同 二十日ヨリ	廿三日マデ	同 西岐波
同 廿四日ヨリ	廿七日マデ	同 三田尻
同 廿八日ヨリ	卅一日マデ	同 玖珂郡高森村宇野氏
(以下未定)		

止めるにも止められず、如何ともすべからずである、或人が病苦に苦しむるとき、時々刻々余の身體を誅殺せんとするもの、如し、之を思ひ彼を考ふれば、現世生存の趣味何によりて之を解せん、狂するが如く、亂するが如く、この五尺の體軀を如何に處して可なるべきかを知らず、夢の如くにして、夢にあらず、我にして我に非ず、進まんか進むに道なく、退かんか退くに處なし、余は實に煩悶苦闘の極點に達し、人類の失心する正に此苦痛の一瞬時にあるを想はしむといふたのは實に生きた二河白道である。

○此時に當りて西岸上に人ありて呼て曰、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、衆て水火の二河に墮せんことを畏れざれの御呼聲がある、汝の言は行者也、實に私一人を呼掛けたまふ親様である、我能く汝を護らん、能の一字は實に如來の御慈悲の御力である、如何に致方なき私も如何なる罪深き私も、如何に失望せる私も、如何なる群賊惡獸が攻め來るとも、如何に異學異見別解別行の人に動亂破壊せらるるとも、水火二河にさへぎらるとも、我能く汝を護らんと仰せてある。水火の二河に墮せんことを畏れざれと仰せらるゝのである。惡をも畏るべからず、彌陀の本願をさまざまぐるほどの惡

講

義

『教行信證』信卷(菩提心釋より)

近角常觀

第三席 菩提心釋

一 私共の菩提心

前席前々席は菩提心について話したのであります。其の要旨は菩提心に他力と自力と二つあつて、他力は私共が飽く迄も見捨て無き大悲の思召を頂き、其の廣大の眞實が私共の心に徹した眞心徹到が淨土の大菩提心である。又自力聖道の菩提心は『歎異鈔』にある如く、我々思うやう人を助け、自ら安心し、自ら往生の大事を決定できるか否か、到底夫れが私共には出來ぬことを申したのである。處て前々席來は自然筋道の話が多くなつた。今席は更に實際的に、私自身が頂いた經驗にかけて話さうと思ふのであります。

前々席來は、法然聖人の御教化は、私共は到底菩提心の及ばぬ者である、又阿彌陀佛の選擇本願は、爲めに其の菩提心をば選び捨て、唯南無阿彌陀佛の一つで飽く迄救ひ果さんとの恵みなることを申したのである。處て平たく言ふに、今日の私共は、全體菩提心など初めから問題にも仕て居らぬのであります。私共法を聞く上に於て、上求菩提下化衆生の菩

提心などは、てんで頭から起さうとさへも思うて居らぬ。思うて居らぬと言つては勿體無きも、事實御同やう思うて居らぬのであります。設へば青年者にする時は、成る程求道といふことはあるも、上求菩提下化衆生などは、思うて居らぬ。又初めから他力を聞いた人にする時は、頭から菩提心などは自力である、そんなものは思つた事さへも無いとなつて居る。すると我々初めから問題にも仕て居らぬ處へ、今突然阿彌陀佛の本願には、菩提心が捨てさせられてあると聞いても、何等の關係をも與へぬ如くにあるのである。處が信仰上からは必ずしも出家入山するばかりが發菩提心で無い。私共如何なる道によらうが、既に道を求めるとある上は、皆な菩提心なのである。上菩提を求めるとは、即ち道を求めることなのであります。

二 得度いが先立つ故いつ迄も

頂けぬ

處て昨夜の談話會に於ても一青年の方は、「私は苦しんでながらも實に不眞面目な者で、未だ佛を信ぜず、又未來を願ふ心も無い」と歎げかれた。これが又無理無いと思ふのであります。今私共安心を求める此の心に、既に佛、未來が有る位なれば、それは既に信心の人なのである。私共今道を求める手前よりは、佛有り未來有りと考へは先き有りやせぬのである。すると私共の其の道を求めるといふのも、眞に上菩提を求めるといふ眞の發菩提心の意味にはなつて居らぬとなる。又從來聽きつけて居らるゝ同行信者の人が、随分後生一大事

碎けて仕舞つた

處て斯う言ふが外で無い、私自身の經驗が之であつたからである。私自身が長い間修養的に此方より心懸けるのであると、長い間夫れてやつて居つたのであるも、どうしてもそれは安心が得られ無つたのである。その中常にいふ實際問題に衝き當り、一層驚きを立て、求めるとなつたのであります。始終のことなれど丁度菩提心の話に當る故、少しく丁寧に言ひますに、私は「自分として今日迄よくやつて来た、人にも親切にして来た」と、自分として正しくやつたと思ひ、又實際やれてると思つてる中は、事なく進んで來られたのである。處が最後になつて何ういふ心が起つて來たかといふに、「自分は之れ程法の爲め力を盡し、又人の爲め之れ程迄にしても、人は自分の心を了解して呉れぬ。人は勝手なもので、自分が是れ程まことにし、正しくし、親切にしても人は、ちつとも認めず呉れぬ」と、一念此の心が起るなり、夫れより右にも心を隔て、左にも隔てるやうになり、今迄長い間「自分は正しく仕て居る、法の爲め人の爲めにも盡くして居る」と考へて居た事が、皆な茲で駄目になつて仕舞つたのである。で順序を言ふと之が前々席の聲の菩提心である。聲の菩提心が私として茲で駄目になつてしまつたのである。必ずしも三僧祇百大劫の修行を要する如説の菩提心を迎る積りは無つたのであるも、知らず識らずの間に私は何時の間か「自分は立派な行ひをする、正しき道を進む、人にも親切にやれる」と、自分が立派な道を行ける如く思つて居つたのであります。で夫

と聞く氣になり、「始終法に心懸けなにかぬ」臨終を取り詰めないかぬ」と、常に聞く事に一生懸命になりて居らるゝ。夫れで眞に取り詰めることが出來るかといふに、誰だつてそんなに切り詰めて思へるものぢや無い。唯「取り詰めないかぬ」と、「せんならぬ」にばかり考を費し、何時迄たつてもいかぬに皆な困つて居るのである。即ち青年者が眞面目な求道心が無いと歎かるゝと同じで、何程取詰めやうと力んでも、ゆかぬとなつて居るのであります。すると斯く自分の方から先き考を運び、「信仰を得んならぬ」「聞かんならぬ」を先きにすることは、即ち發菩提心を先き立てる行き方で、それでは到底ゆけぬといふことである。今法然聖人が、彌陀の本願は菩提心を先き立てるで無いとあるが茲なのであります。又前々席來言ふ大原氏如きは、一昨年来自分の母を失ひ、子供の妻を失ひ、又自分の妻を失ひ、之は萬事差し措いて未來を安心せず居られぬとなつて、最後には東京迄其の爲め出て來やうとせられたのである。するところは出離の大事が、立つても居ても心配で在られぬので求められたのであるから菩提心かといふに、然うて無い。矢張り是れ行く先きが暗い、未來が恐ろしいばかりで苦まれたのであるから、菩提心などは言へぬのである。又設ひ眞實の菩提心が起せた處で、我々の未通らぬ。總て斯く老人も青年も、求めたら得られやうとの考えが根本になり、求める力で得度いと根性であるから、誰も彼も皆な得られ無い、となつて居るのであります。

三 私の菩提心は斯くして皆な

れてやつてるにも係はらず、人は夫れ丈の考えを以て自分のする事を受けて呉れぬ。サア私は満足が出來無くなつて來たのである。又人間は他が悪いと思つてる中は、自分の悪しさに氣がつかぬ。處が私は豫て人が設え自分に對し悪しく向つても、夫れだと言つて此方が又悪しき考えて向ふは、此方が隔てるものである、との常の考えてあつたもの故、如何に人が自分を隔て、自分よりは飽く迄意に介せずやればよい、とは頻りに思へども、今言ふ一點の隔て心が滿して見ると、何程力みても最早や其の人が善く思へ無い。所謂トルストイの無抵抗主義であります。即ち何處迄も敵をば愛して行く可きを私は長い間理想として考へ、又夫れをば實際にも實行して居る積りで、長らく居つたのである。成る程表面は夫れてやれて居つたのであるも、人に親切にすればするだけ、夫れがあとで不足に思ふ種になり、人を頼めば頼む程あとで疑惑の心が増して來る故、私はそれ迄無抵抗であるの、敵を愛するのであるのと、いつか自分の正義道念を頼んで居つたことが一遍に皆な茲で碎けて仕舞つたのである。茲は皆さんに之を我々自力の菩提心では到底行かれぬ事に聞いて頂き度いのであります。

四 信者の人が若し斯ういふこと を思はぬか

或は皆さんは、三僧祇百大劫の修行を要する自力の菩提心は初めから心頭にも上して居らぬと言はるゝかも知れぬ。成る程我々は衆生無邊誓願度の自力の大菩提心は起して居らぬ

のでありますけれども、心の底を尋ねると、何人も「自分の方へ善く仕て居れば、人も自分に善く仕て来る」といふ根性が、心の根底をなして居るのである。之なら結局衆生無邊誓願度も同じなのであります。古來眞宗の信者が必ず決まつて言ふには、「我々は此の世の俗諦の上では全く開みてあるも、眞諦門のお慈悲頂いた上は、俗諦門の王法仁義を守り、設へ人が悪しく向つても、自分の方よりは飽く迄善く仕て行かなければならぬのである」と、此の考えの上より頻りに王法爲本を勵むが、所謂眞宗信者の俗諦門となつて居るのである。之が其の人に於ける時は信仰上よりの俗諦門の積りて誤らるゝので有らうも、之では其の眞諦門の信仰其物が甚だ危しいと言はなければならぬのであります。何故かと言ふに、眞諦門の上では悪くてもよい、出来ぬでもよいと頂いて、俗諦の上では飽く迄善くせなければならぬ、務めなければならぬといふのである。之では何處迄行きてもお慈悲に心が折れるといふ處が無い故、矢張り何時迄も善く仕てゆかなければならぬといふ自力根性である。之では本當に安心がなされる善無いのである。私は先達で大阪附近の茨木に參つて話した時、茲の處を出来るだけ根性悪う話して来たのであります。夫れは「同行信者の人が若しや斯のことを思はぬか、設えば家庭の間に於てあれ日常交際の間に於てあれ、人が不親切に自分に對して取扱つた場合に、自分はお慈悲頂いてる故黙つて虫を抑えて居るのである。自分はお慈悲を喜ばして貰うて故黙つて居るのだから、悪いのは矢張り何處迄も相手が悪いと思はぬか。若し夫れだとすると、自分

はお慈悲頂いてる故自分の方は善けれども、人は頂かぬ故人の方が何處迄も悪い」といふことになり、之では我が身は悪しき徒ら者と頭が下つた眞宗信者としては甚だ可笑しいては無いか」と話したのである。すると皆なが驚きて、「私達は今迄然らばかり思うて居た、然ら思ふ故何う仕ても人に不足の思ひが取れなんだ」と言はるゝ。私は「それはちつとも俗諦門が守れて居ぬては無いか、お慈悲頂いた上は務めて人にも善く仕て行かねばならぬと、大力味でする俗諦門なら、信仰上の俗諦門で無い」と話して来たのであります。サアすると之が皆な自力の菩提心である。處が私は、今言ふ如く、その長い間人にも善くし、誰彼にも親切に仕なければならぬと思ふて居たことが、實際になりて皆な駄目になつて仕まつたのである。之が自力の菩提心が駄目なことが、私に現はれて来た様であります。

五 自分より善くする道では一歩

もゆかれぬ

そこで法然聖人が「菩提心は佛の本願も捨てられてある、佛の本願は菩提心無き者が、直ちに廣大なお恵みを蒙るのである」とお知らせ下さるが、茲である。法然聖人が斯くお示し下さるは、もともと阿彌陀佛の本願は、本願の昔に於て、我々が到底善く出来ざることを知召し、其の出来ざる者の爲めに御起し下された願である。故に我々の方から菩提心を起し、善く仕やうとするのでは無いぞ、我々の方は到底善く出来ぬ者であるぞ」とお知らせ下さるのであります。處が常に

言ふ、梅尾の明恵上人はひどく之に反對して、「苟も佛道修行といふ者が菩提心を捨てるの戒律を修せぬと、そんなものは佛教で無い外道である、惡魔の法である」と、きつく之を排斥せられた。之が今日より言ふと何でも無きやうであるも、明恵上人と申せば、實に一代の傑徳である。泉州堺の浦の波に足を浸して、「自分は釋尊の御蹟を慕ひ、天笠に參り度けれども參れぬから、せめて此の水は天笠の岸洗ふ水であるから此の水に足を浸して釋尊のみ蹟に參る思ひをする」と喜ばれた明恵上人である。又菩提の爲めには自己の身をも捨て可きであるが、他の所を傷つけては修行の妨げになるからと、自分で自分の鼻を削ぐられたといふ明恵上人である。故に自力主義の上より言ふと、此の上も無くお心の嵩き明恵上人に殊に承久の亂の時には、北條泰時が能々前以て示教を仰いだといふ、明恵上人である。其の明恵上人にする時は、我々が菩提心一つ起せぬ其處を佛が兼ねて見て下されたといふは如何にも淺間しく思召したも無理の無いのである。處が法然聖人が特に際立て、茲をお示し下されたといふは、畏れ多きことなれども、私が過古の道行きを考へると、私が實にそれ一つで何うしてもいかなんだのである。私が一分一厘、爪の垢程でも人の爲に仕ておくと、何うしても、自分は仕て置くといふ思ひが取れぬ。設ひ言葉や形では殊勝らしくつくつて居つても、心の善根に其の思ひが離れなんだのが私である。て自分の方より菩提心を運び、自分の方より善く仕て行く道では、私共は何うしても行かれぬ。茲の味ひは信仰として最も大切な點であつて、之を今日の青年の上で言ふ時は、先達で

もどなたか、「自分は飽く迄綺麗な心になり、飽く迄人と和らいて行き度いと理想を持ち、求めて居る」と言はれた。之が誠に結構なのであるも、之で行けば求めれば求めるだけ、必ず行き當るに定つるのである。若し之で満足さるゝなら其人は寧ろ眞實の所迄いかず、中位の所に停つて居るに違ひ無いのである。若し眞に眞面目になれば、やればやる程自分はずらぬといふ事になり、そうして其の極今度は反對に人を怨み隔てるやうになるにしまつて居る。故に私は最後にこれ、「彌々自分は隔て無き人に迄隔て、惡意無き人に迄惡意をおこさせる程のひどい自分である」となつたもの故、最早や此方より善くする道では、一寸も一分もゆかれぬとなつて仕まつたのである。之が前々席來の堅の自力の菩提心が、茲で全く私には駄目になつて仕舞うたのである。茲で私は最早や自力の方法では、一歩もいかれぬとなつて仕舞つたのであります。

六 お慈悲をすかして居る人

此の時私は猶ほ斯うも思うたのである。「これは自分より飽く迄人に隔てぬやうにすれば、人も自分を隔てず。自分より飽く迄善く仕て行けば、人も自分も善くして、平和に行けるにしまつて居るのである。故に飽く迄自分の方へ善く仕て行けば善い」と迄は分つて居るのであるけれども、其の自分の方より善く思ふことが、私には何うしても出来無つたのである。てこれは他力の教えて、「我々は一善一行も出来ぬ、曾無一善だ」といふのを、聞く人の方が初めから善をせんならぬとい

ふことを問題にして居らぬもの故、「こは我々には善が出来ぬといふことだ」と、極めて軽いことに取つて仕舞つて居る。之では會無一善が分つたのも何でも無い。其の證據には會無一善と言ひつゝ一面、「自分はだから少しも善く仕て行かなければならぬ」といふは、甚だをかしな話なのであります。我々初めから「自分は悪い者だ」と、初めから平氣で頭を下げて仕まつて居るは、慈悲に敗けて頭が下つたのとは別である。夫れは慈悲に敗けたのも何でもなくて、初めからお慈悲に取組み合はず、自分は悪いと、初手からお慈悲をすかして居るの故、佛の廣大のお心が頂けたのも何でも無い。私如き、最初から此の罪深きを哀れんで下さるが佛であると、自分の仕て見やう無き心にお慈悲を引きつけて喜んで居る中は、「併し出来る丈けは善く仕度い」との思ひが如何して止まんだ處が今いふ人生の實際問題に突き當り、「自分は何うしても人のことが善く思へ無い」となつて見ると、「今迄法の爲め、人の爲めにも盡して來たと考えて居たことは、一つも本當の善では無つた。本當の親切であつたなら、設へ自分の仕た事を人が認めて呉れぬかて、又人が仕返して呉れぬかて、不足が有る可き善は無いに、夫れが目につくといふは眞に法の爲め人の爲に、仕て居たのでは無つたのである。結局自分は熱心家ぢや、精神家ぢやと、人に褒められ、彼れ是れ言はるゝを頼みに仕て居たのであるから、今迄色々仕たことは皆な名利である、人によく言はれんばかりに仕て居たのである」と氣がついて來ると、今迄幾多の犠牲を拂ひ、骨折りてやつて來たことが、皆な名利勝他の念一つから仕て居なかつたは

無つたのである。で前席に於て聞不具足といふことを仰せられた。聞不具足といふは、是の六部の經を受け己つて、論議の爲めの故に、勝他の爲めの故に利養の爲めの故に、諸有の爲めの故に持讀誦説せんとあるが之なのであります。

七 出來ぬともう仕て見やうが無し

すると今迄何れ程骨折りてやりて來た事も皆駄目である、自分のする事なすことに鏗一文の價値も無い。私が前年備後の三次なる所に參つた時に、野村氏なる地方の熱心家が居られて、「今日の坊主にまかせて置いては駄目である、居士がやらなくていかぬ」と頻りに法の爲め盡して出でてになつた方である。其の方が私の參つた時同志を連れて聞きに來られて、まだ挨拶もせぬ先きに、私が今の「多年法の爲め、人の爲めに仕て居ると思つて居たことは、一つも法の爲め人の爲めでは無つた、皆な自分の名利の爲め、名譽の爲めであつた」と話を聞きて、其方は「いきなり刃を以て胸をつん割かれた思ひが仕た」と言はれた。「自分は今日迄坊主では駄目である、居士で無くてはといつかど思込んで居つたのであるが、只今の一言を聞きなり一言で、刃で横腹を突きさされた心持が仕た」と言はれ、夫れから大層熱心に聞き出された。それから段々話したら、脇腹に突きさされた刃で、今度は切り廻はされた感じがしたと言はれたことがあります。で今迄夫れ程迄

に仕て置いた事も、一念夫れ丈けに人が認めて呉れぬとなる、忽ち皆な駄目になつて仕舞ふ、即ち悉く皆な名利である、勝他の心に過ぎ無いのである。最後に私は、「自分は斯くなれば最早や人の埋め草に終るばかりだ。自分はどうせ法の爲め死ぬても更に不足とせぬが、斯くの如き世の有様であれば、一體此の世の中が仕舞ひは何うなるだらう」と、そんなこと迄思つて居つたのであります。處が之が法の爲め甚だ感心なやうの考えてあるが、こんな無理押しつけの無抵抗などは駄目である。斯くなり出すと、今迄高きに居た丈け、墮ちる方も底が無い。今迄自分がいゝと思つて居つた其の善いが一息なくなり出すと、もう仕やうが無い、もういかに、段々心の動いて來ると共に人に怨み、嫉みの心が生じて來る。で昨夜はこんなこと迄申して居つたのであります。夫れは其時私は一面道徳心で責められるの故、今迄多年正直さうに言つて居つたことが皆な虚言を言つて居つたとなり、人に對しても今更何とも申譯けが無い。もう自分は何んと申譯けしてよいか、申譯の辭も無いと一面夫れ程申譯けなく思ふと共に、一方夫れ程自分が悪しくなつてしまつたのであるから、「自分が實につまらぬ、今迄長らく眞面目顔にやつて來たにあ、實に惜しいことを仕た、取り返しのかぬことになつてしまつた」と、如何しても今迄の虚名を捨て兼ねるといふ、茲一つが何うしても動かれぬ處になつて仕舞つたのである。すると今迄法の爲めであるの、人の爲めだのと言つて居つたことは皆な虚言であつて、結局自分といふものは、人を羨み嫉む名利の念の外に無い。で若し法然聖人が、菩提心有る者が

頂く慈悲であるなど、一言でも言ひ置いて下された自には、此の煩惱興盛の塊りは、茲で如何うしても救はるゝ道無いのである。法然聖人が有らゆる迫害に遭ひ、生命がけてお知らせ下されたは、茲をお知らせ下されたのであります。又青年の方に言ふならば、親鸞聖人も法然聖人も、あなたの本當に仰しやつた處が、ほんとの所を言ひ置いて下さるのである。私は遠慮なく言ふに、今日戒定慧の三學を、ほんとに我々末世に行へると、聖道門の人は思つて居らるゝのであらうか何うか。設へまもれいてもまもらぬならんと思つて居らるゝのだらうと、思はれるのである。處が親鸞聖人や法然聖人の仰せられるは、我々は初めからまもらなくてもよいと仰せらるゝので無い、守る可きが我々としては實は當り前なのである。然るに其の守る可きことが、我々は如何しても守れ無い。で茲で「守れいても外に仕やうが無いから」と落つて居られるは本當で無い。設え守れても守れなくても守らな道は無いのであるが、夫れが守れ無いとすると、我々はもう仕て見やうが無いばかりである。もう茲になると我々は何うにも斯うにも仕て見やうが無い。唯行き詰るばかりとなつて仕舞ふのであります。

八 詮方つきてこしらえて居る信心

そこで皆様の上に言うに、已上にて成る程今迄はあれこれと思つて居つたが、夫れが到底出來ぬといふ丈けは、お分り下されたこと、思ひます。すると茲で「其の仕て見やう無く出來ぬ、其の者をお見捨て下さらぬが佛のお慈悲と頂いて、

安心するので無いか」と言はるゝかも知れぬ。之が又本當で無いのである。問題は茲になつて来るのであります。我々「斯くの如く淺間しき者を見捨て下さらぬが慈悲である、此のやうの者を遣る瀬無く言うて下さるが佛である」といふ、之が慈悲を頂いたに似て實は頂いて居ぬのである。之が唯然ういふ風にお慈悲を自分でこしらへ、淨土を作つて喜んで居る迄に過ぎないのである。故に我々茲で「自力の堅の道ては到底いかぬ。今度は他力の横の道で安心させて貰うて無けりや」と言ふことになると、茲で他力を持つ来て、而も夫れが眞の他力を頂いたのでなくして、唯徒に「斯ういふ者を遣る瀬無く言うて下さるが有難い」と、喜んで居るやうなことになる。之では眞の佛のお慈悲を頂いたで無くして、空に自分で慈悲をこしらへ胸を撫てつけ、押えて居る信仰である。故に何うしても眞實の安心が出て來ぬ、となつて居るのであります。そこで之は横の中でも横出の方である。他力は他力なるも、未だ眞實の佛が見えて無い。假の佛である、僞の佛である、主觀的に自分と自分でこさへ上げた佛である、自分と自分で押付けて居る信仰である。定散自力の信仰である。眞實實行の信仰である。茲にお出になる方々には、特に之に氣を付けて頂き度いのであります。て斯ういふ喜びに止つて居る人は、口では聖道門など迎も出來ぬと言ひつゝも、心では知らず識らずの中に、矢張り少しも善く仕度いと思つて居る。私は思ふに之なら全く聖道門も違はぬのである。而して夫れが實際出來ぬとなると、忽ち斯ういふ者を見捨て下さらぬのが慈悲である」と、之で漸く押えつけて居る信

仰である。即ち自分と自分で慈悲なるものをこしらへ、自ら其の中に這入つて心を休めて居る喜びである。こは殊に多年熱心に聞かれた人達に多いのであるから、殊に氣を付けて貰はなくてはならぬのである。

處が青年の人や、今迄聞き慣れて居られぬ人になると、こんな事では一刻も満足して居られぬ。茲になると私など、仕舞ひはこんな考を起して居つたのであります。夫れは「最早や自分よりは善くすることが出來ぬ、到底隔て心が取れぬ。去りながら若しや若し此の自分よりは隔てが取れぬのを、向ふよりよく了解し、打解けて呉れる人が有つたなら如何に嬉しうであらう。自分が斯く悪しき心が止まぬのを、向ふより可哀相と洞察して、自分より隔てれば隔てる程、益々隔なき心で向うて下さる人有つたなら如何に隔て心の私も隔てなくなる事が出來るであらう。然ういふ親切な人は無いか」と求め居つたのである。之が形は他力を求めて居る如くであるも、此の「然ういふ人は無いか」といふ思ひが他力中の自力の菩提心である。此の「無いか」といふ思ひが、之が即ち菩提心なのである。て今いふ如く、然ういふ人が佛であると茲で自分の方より佛を持つて來て落付いて居るは、こさへも一の信仰であつて、夫てはならぬ。之では定散心の念佛に止まつて居るものである。定散心の念佛といふは、必ずしも口稱するばかりが定散心ぢや無い。斯る者をお助へると、茲で無理やりに喜んで居るのも定散心のこしらへ物である。又「然ういふ助け手は無いか、然ういふ同情者は無いか」と、茲で恰も石重丸が親を求めが如く求めて居るのも、矢張り定散

心でうろついて居るものであつて、もとより眞實の安心では無。

九 五劫の昔に佛兼て心中を知召し

然らば眞の他力とは何うかといふに、茲で最後の如來廻向といふ事が現はれて來るのであります。常に言ふことなれども、私など苦しんだ時は「今となりては自分は何一つの取り得も無い、全く道端の瓦石土塊同然の、取り得無き、淺間しき、疑ひ隔ての根性で一杯の私である。てこんな者なら人が呆れてしまふに決つてる、誰も打捨て相手に仕て呉れぬにきまつて居る」と、一途に私は然う思つて居た。そこで私は、最早や信心で安心が出來るといふ念迄無くなつて仕舞うて居たのである。之が最後に他力の菩提心迄が倒れて仕舞うた處である。「自分は今迄も慈悲を喜んで居たに、遂に仕舞ひはこんな有様か」と思ふと、最早や信心や佛などは此世は到底開けぬと、佛や信心迄も私は捨て、仕まつて「唯此の苦しい淺間しい心中を、誰か一人察して哀はれ可哀相と言つて呉る、者は無いか」と唯こればかりになつて居つたのである。て「誰か然ういふ親心な人は無いか、友人は無いか」と、夫れ迄思つたのであるけれども、何うしても安心の道は出て來無い。而して最後に心が變はつた時、始めて其の土塊石塊の如き私の心中の、其の淺間しきとん底を飽く迄知り抜いて、「其の、人に如何しても隔ての止まぬ、其の淺間しき根性を持つて居る汝の身が可哀相である」と、私の心の底の底迄も既に五劫の昔に見て取つて、遣る瀬無き廣大の同情で向つて、下さるが

佛であつたと、初めて茲で氣づかせて貰つたのであります。て茲の處は『選擇集』の御教化が、實に有難い。私共は茲迄行き當つて初めて自身の頼み無きを知るのであるけれども、佛は既に五劫の昔に於て、私共は到底菩提心の起らぬ、父母孝養奉事師長の出來ぬ、夫れを見抜いて下されて、長々御心配の南無阿彌陀佛の御廻向であるとお知らせ下さるのである。吾が親鸞聖人は、法然聖人の膝下に、思ひがけなく此の御教化を受けられたから、一言の下に

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀に助けられまいらずべしと、よき人のおほせをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。

「あ、聖人はお師匠のお言葉を、よくすなほにお聞きなされた」と思ふたら大間違ひである。師の仰せ故と、茲で一毫でも計らひの加はつた聖人のお喜びぢや無い。何で法然聖人を往生の善知識とお喜びなされたかといふに、斯くお知らせ下さる法然聖人のお言葉の下に、「あ、今日迄此の悪い心の止まぬ、之を五劫の昔に佛は知召して下されたのであるか。此の何うしても菩提心ではゆけぬ、孝養父母奉事師長の出來ぬ、此の諸の罪深き親鸞の心中を、之を五劫の昔に於て見抜いて下されたのであつたか」となつたもの故、もう頂かんと置こうと思つても頂かずには居れ無くなつたのである。之は昨夜も或人が自分の苦みを言はれたから、私の方からあなたは斯ういふ思ひが有るのであらうと言つた。すると其の人は然う言はれた丈けて、はや廣大の信心に満足せられる。「自分よりは未だ打明けても言はぬのに、何とよく自分の心を

見知つて「されたもの」と思ふなり、もう頭が上らぬのであ
る。他力は實に茲である。茲で自分の方より、斯ういふ者を
お助けと持つて行つたのは、自分のこしらへものにある。處
が此方は突き當りて、何うにも斯うにももう仕やうが無い。
處へ善知識の御教化で廣大な本願のお意を聞くと、佛は既に
五劫の昔に私が修行戒行の及ばぬこと、智慧高才の無いこと、
「其の仕て見やうなき夫れを五劫の昔に我は能く見て居るぞ」
との廣大なお心である。私共は平生五劫の思惟と聞いても、
此の仕て見やうなき、これ迄はと言ふ氣があるから分らぬ。
處が「汝に其の心のあることを、夫れを我は見したのである。
夫れがあるから、其の汝をいかにと我は斥けるので無いぞ。
その仕て見やうなき有様故、苦しいのも無理が無い、惱まし
いのも最もである、故に我は疾うからひやくして其の汝を
見て居るぞ」とある大悲の仰せが、實に五劫思惟の願なのであ
る。こは餘り人生的に言ひすぎるかなれども私は茲一つて頂
いたのだから、こゝ一つを聞いて頂かねばならぬのである。
親鸞聖人が『歎異抄』で

彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、親鸞一人がため
なりけり。さればそこばくの業をもちける身にありける
を、助けんとおぼしたちける本願のかたじけなさよ。
と仰せられたが之なのであります。

一〇 仕て見やうなき者でも無い

そこで法然聖人の『選擇集』の御教化は、愚癡無智破戒無破
發菩提心の無き者、孝養父母奉事師長の出來ざる者、其者を

され、既に前席にも申したのであるが、法藏因位の昔に於て
彼の佛因中に弘誓を立つ、名を聞いて我を念せば總て迎來
せん。貧窮と將富貴とを簡はず、下智と高才とを簡はず、
多聞と淨戒を持つてるとを簡はず、破戒と罪根の深さとを簡
はず、但廻心して多く念佛せしむれば、能く瓦礫を變じて
金と成らしむ。
とある廣大の本願である。て其の罪深き者でも無い、其の
罪深く仕て見やうの無き其の者の爲め、其の者が哀れて捨て
られぬとのあなたの思召の塊が、本願である。而して其の罪
深く、菩提心すら無き者とは、人のことと無い此の親鸞一人
の上であるとお頂きなされた爲め「彌陀の五劫思惟の願をよ
く／＼案ずれば、親鸞一人が爲めなりけり云々」の御喜びと
なつて來たのであります。

一一 お慈悲と私と、どちらが勝つか

てこは甚だつまらぬ経験なれども、私にしても一番最後は
最早や他の思ひは無つたのである。「あゝ世の中に、最早や友
人であらうが、親兄弟で有らうが、一つも當てになる者は無
い、勿論自分は、何一つ善いことが出來ぬ、あゝすればよい、
斯うすれば救ひがあるの救へは聞く丈け聞いたけれども、最
早そんなことは間に合はぬ、もう仕やうが無い」となつて
居つたのである。こうなつて居る處へ思ひがけなく最後に、
然ういふ仕て見やうなき私の心の底迄知り盡くして下され、
其の汝を捨てぬとの廣大の思召に向ふより私に向ひづめにし
て、下さるお慈悲と氣づかせて貰うなり、其の時、もうたゞ

御見捨て無き本願であるとの御教示なる事は、『選擇集』を見
た者は、誰でも皆な讀んで知つて居つたのである。而も其の
讀みやうが、皆んな「其の者でも助け給ふ本願である。其者
でも助けて下さるのであるが、併し出來る丈けは善いこと仕
た方がよいであらう、何も出來る學問修行迄態々捨てるにも
及ぶまい」となつたもの故、折角『選擇集』がありながら、
御門弟三百八十餘人の人達は、皆んな御眞意が頂け無いて仕
舞うたのである。處が親鸞聖人御一人のお氣づきなされたは
「成る程『選擇集』に發菩提心無き者と仰しやるは、此の自分
が二十九歳の今日迄、之て求めたが、いかなんだのである、
菩提心では駄目であつたのである。爾るに其の仕て見やうな
き親鸞の顔を御覽下され、それを捨てぬとの遣る瀬なき思召
てましたのであるか。『選擇集』に破戒無戒とあるは、外で
無い此の愚禿の身の上である、愚癡無智は此の親鸞のことと
ある」と、茲一つを見ぞこなつたら、折角の選擇集の御教
化も、其の詮が無い。彌陀の本願は言へなくなつて仕舞ふの
である。佛の本願はこんな者でも助けてやらうとの仰せと頂
くから、「でも助けて下さるのであるから、況や善いことした者は
よけ助るだらう」といふ事になる。それなら「悪人なほもて
往生す。いかに況んや善人をや」といふことになる。何ぞ知
らぬ、我々善いことが出來る位なら、阿彌陀佛は本願をお起
し下さらせぬのである。我々今迄、戒行が出來る、親切が
出來る、正しくやれると、然う今日迄思つて居る、其の思ひの
淺間しき思ひの少時しばしばも止まぬ、其の心中を佛既に洞察して下

之れ一つであつたのである。「あゝよくも／＼之れ程の私の悪
しきに呆れず、之れ程の悪しきを哀はれみ、之を見捨て給はぬ
とは何たる難有い思召か」と、其の瞬間此の思ひがひとりてに
胸に一杯になつて來て、もう頭が上らなくなつて仕舞うたの
である。不思議は實に茲である。彌陀の誓願不思議が届いて
下さるといふは之である。て其處には私が善いことが出來た
らよいの思ひは一分一厘無い。も一つ言へば、設え他方に這
入つて居ても、若し茲で「念佛稱へると氣持ちがよい」など
いふことが、一寸でも目につくやうなら、もう可かぬ。處が
さればとて、又「悪るくてもよい」といふて無い。古來眞宗
信者が「悪しくてもよい」と言つて下さるので、頂いて居て
皆んな薩張り安心がついて居らぬのである。私共の性分にす
る時は、設ひ人が悪るくてもよいと言つて下されたとして、向
ふはよいと許して下さるか知らぬが、悪しくは私の方が困
るとなつて來る。そこで慈悲ある人の呼び聲は更に一段と上
に出て下されて、「成る程悪しくては汝氣が濟まぬだらうが
其の濟まぬ／＼と汝の氣を揉んで居る處、そこが我は可哀相
てならぬのである。汝、出來もせぬことを、せんならぬ、せ
なすまぬと何時迄も言つて居るが、其のすべきことが出來ぬ
とこ、なるべきことがならぬとこが我が涙のものぢやとこれ
程迄此方で言つて居るに、ちつとは此方の心も受けて呉れぬ
と、我は恨みに思ふぞ。汝に茲一つを聞かせたけりやこそ、
届けたけりやこそ、我は五劫の苦勞も仕た、阿彌陀佛とも成
つたので無いか。それに汝は何時迄そんなこと言つて居て、
我が此れ程迄に汝に知らさう爲め、十劫以來待ち兼ねる此の

心を聞いて呉れぬのか」と凡て私共は人の親切を尻に敷き、すね廻はり、ひねくれ、すかす根性にて、佛のお慈悲を無にして居る。此の私共の横着な根性と、夫れを益々哀れみ飽く迄お見捨て無き廣大の思召と、角力を取りてどちらが勝つか。勿體なや今日迄は、

三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、

大菩提心おこせども、自力かなはて流轉せり。

今日迄は私の方が勝つてお慈悲の方を突きやつて居つたのである。「佛も有らうが、自分のことは自分でよくせんらぬ」と、佛を突きやつて居るのである。よく青年の人が、「佛が有ると思へぬ、自分のことは自分でやるより仕やうが無い、向上主義だ、努力主義だ、奮闘生活だ、至誠でやるんだ」と言つて居るのは、之れ皆な佛を突きやり、自分を立てやうといふものである。一步進みて「自分が悪い、人が相手に仕て呉れぬ筈だ」と言つて居るは、頭を下げて居るに似て、大變よきやうであるも、之れ又お慈悲に刃向ふて居るものである。即ち如何な佛でも自分のやうな悪人には、呆れて仕舞ひなさるだらうといふ、此の機歎きである。即ち自分を悲観する餘り何時迄もこんなことではといふ、形はやさしけれど、矢張り何處迄もこれではといふと、お慈悲に刃向うて居る者である。即ち其の仕て見やう無さを救はうといふお慈悲より言ふと、皆なお慈悲を空しく仕て居るものである。「唯信鈔」のお言葉には、

よの人つねにいはいく、佛の願を信ぜざるにはあらざれども、わが身のほどをはからうに、罪障のつもれることはおほく、

仕舞はれるだらうなどと、そんな力弱き佛と思つて居るのであるか。勿論佛は悪しくてよいと言つて下さるので無い。小供が不具でよいといふ親は一人も無いのであるが、併し其の不具が生れて來た時は、夫れが哀はれて可哀相でならぬのが親の親心である。今大悲の佛の仰せは何とあるか、といふに私共が罪深くして、其の當り前起すべき菩提心さへよう起さぬ、當然爲す可き父母孝養奉事師長さへ彌々となれば力叶はざる私の身が不便なばかりに、其の淺間しき奴が放つて置かれぬから、其の者の爲めお見捨て無き思召の有り丈けがあらはれて下されたが、本願である。『歎異鈔』の仰せには

善人なほもて往生をとぐ、いかにいはんや悪人をや。この條、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひた、彌陀の本願にあらず、しかれども自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり。

善いことの出來る善人でも、其の出來る／＼と今迄思つて居つたが誤りと、今迄の自力作善を廻して、本願を頼み參らす時は救はれる。即ち龍樹天親二菩薩でも、今迄の自力の善を廻へして、本願他力に歸せられたのである。『和讃』には

像法のとさの智人も、自力の諸教をさしおきて、時機相應の法なれば、念佛門にぞいりたまふ。

斯く尊とき大聖の聖者でも、自分の善ではいかぬから時機相應の要法たる本願念佛によられたのである。如何に況や、

善心のおこることはすくなし。こゝろつねに散亂して一心をうるることかたし。身とこしなへに懈怠にして精進なることなし。佛の願ふかしといへどもいかてかこの身をむかへたまはんと。

即ち斯くこんな罪深きことでは、懈怠なことではと言ふて居るは、皆なお慈悲に刃向うて居るのである。爾るに此の次ぎのお言葉には

このおもひまことにかしこきにたり、憍慢をおこさず、高貢のこゝろなし、しかはあれども佛の不可思議力をうたがふとがあり。佛いかにばかりのちからましますとしりてか罪惡の身なればすくはれがたしとおもふべき。五逆の罪人すらなほ十念の功によりて、刹那のあひだに往生をとぐ。いはんやつみ五逆にいたらず、功十念にすぎたらんをや。つみふかくばいよ／＼極樂をねがふべし。不簡破戒罪根深といへり。善すくなくばます／＼彌陀を念すべし、三念五念佛來迎とのたまへり。むなしく身を卑下して、こゝろを怯弱にして佛智不思議をうたがふことなかれ。

即ち「汝はこのやうな悪い心では、誰も同情して呉れぬ筈である、誰も捨て、仕まうに違ひ無い」と歎き悲み、最後は佛迄がこんなことでは仕て見やうがあるまいといふて居る。が、此の思ひ誠に賢きに似て、憍慢の心なく、まことにいじらしきやうではあるが、爾れども佛の不可思議力を疑ふの咎がある。佛如何ばかりの力ましますと知りてか、罪惡の身なれば救はれがたしと思ふべき。汝は佛のお力が何れ程と思つてか、自分が斯く罪深い爲めに佛が呆れ、救ひの手を控えて

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まし

て悪人はとおほせさふらひき。
「善い者を助けて下さるが、悪い者でも助け給ふ」といふので無い。其の如何にしても善く出來ぬ。斯くすれば善いとは思へども然う出來ぬ、其の苦しき心中を五劫の昔に見て取つて、其者が稱へられ、頂かれるやう念佛を御成就下されたが廣大本願の思召である。故に「他力をたのみ奉る悪人もつとも往生の正因なり。」もう茲一つである。親鸞聖人が九十年の間涙を流し、苦勞して、くどく／＼信心々々とお説き下されたは、我々此の罪深くせんすべ無い此者の爲めに、態々お起し下された廣大本願の御哀はれみなることを、これ一つをお知らせ下され度いのが、あなたの御教化の腸であつたのである。聖人のお知らせ下さる浄土眞宗は、もはや此の外に無いのであります。

一一 若干の業をもちける身に
ありけるを

では『歎異鈔』十三章の御教化で頂いても、よきこゝろのおこるも善業のもよほすゆゑなり。悪事のおほはれせらるゝも、悪業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、毘毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるのみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひ

この業報といふことを佛教を聞く人が取り違えて、まだ本願を頂かぬ中から、「我々のすることは皆な業報のなむだに仕やうが無い」と、業報に任かせて仕やうがないと言うて居ることを信心と申して居る人がある。仕やうがないと泣いて居るのが信心である譯けは無い。併しながら其の業報にく入れ縛られ仕て見やうなき様に在る我々に對し、「成る程汝等業報なれば、思ひかけぬことを仕てかすこともあらう。うみかばにあみをひき、つりをして世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりにのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畑をつくりてすぐるひとも、たゞあなじことなり。さるべき業縁のよほせば、いかなるふるまひもすべし」とこそ聖人はおほせさふらひしに云云。

と、佛より此の業報の身を見て、此の業報の身を哀はれとお見捨てなき本願なればこそ、「彌陀の五劫思惟の願を案するに……」さればそこばくの業をもちける身にありけるを云々」と御喜びなされたのである。業報任かせて仕舞ひならば「そこばくの業を持ちける身にありけるを」と仰しやる譯けはない。我々は實になすこと考へること、實に惡業深き身であるが、この若干の業をもちける身にありけるを「助けんとおほしめしたちける本願の忝けなさまよ」——我々は、我と我が心に任せぬ如何にも業深き身であるが、其の業に打ち勝ち給ふ慈悲の方が飽く迄強き故、

願力無窮にましますば、 罪業深重もおもからず、
佛智無邊にましますば、 散亂放逸もすてられず、

か、最後の最後に、是程此方よりは疑ひ隔てて居る私を、夫れを夫れ程迄に哀れみ捨てられぬとの偉大なる御思召なりしかと一念氣がついて來るなり、忽ち慈悲の前にもう頭が上ら無い。成程「若干の業を持ちける身にありけるを、助けんと御思召したちける本願の忝けなさまよ」と。茲になると『歎異鈔』の御教化はひどい、斯う迄仰しやつておいてになるのである。おほよそ惡業煩惱を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にほころおもひもなくよかるべきに、煩惱を断じなば、すなはち佛なり。佛のためには五劫思惟の願、その詮なくやましますさん。

私共は長い間、煩惱惡心が止まりて、夫れから佛の慈悲を頂くなら、本願ほこりの横着にも墮ちなくてよからうと、そんなことを言うて居るのであるが、それなら自分で煩惱無邊誓願断と、自分で菩提心を振立て、自分で煩惱を断じ自力で佛にならうといふのである。それなら佛の五劫思惟の願も何も要し無い。然るに今佛の五劫思惟の本願は、私共が如何にしても其の煩惱惡業が止まぬ夫れが哀はれて捨て置けぬとの廣大な仰せ故、茲を聞かせて貰ふなり、一念に、

能く一念喜愛の心を發しぬれば、煩惱を断せずして涅槃を得(『正信偈』)

茲の不斷煩惱得涅槃を、私共煩惱が止まぬ者に對し、止まぬが可哀相て仕やうがないとの仰せ故、何時迄も煩惱のあることだと取つて仕舞つたら、取りぞこなひである。私共我と我が手が煩惱が取れるでは無けれども、

罪障功德の體となる、 氷と水のごとくにて、

私共は、毎に疑ひ隔ての根性で、佛に刃向ひ詰めに仕て居る私なのである。——又先きにも言ふ如く、私は惡るうムりますと、初めから佛に頭を下げてしまつて居るは、業報の儘てようムいますと、折角の慈悲をすかして仕まつて居るものである。其のすかし遁げ廻はつて居る私と、其の然らういふ心根が哀はれ捨てられぬといふ大願業力と力較して何れが勝つかの話である。私共は初めから煩惱惡業の儘てよろしいといふ譯けは何んなことあつても無い。其の惡業煩惱の爲め、人を恨み腹立して居る私なのである。爾るに私共の其の不まことと夫れ程迄に見過しに出來ぬとある佛の御まこと——言ひ換ふれば佛の御まことは、私の不まことの様を見て下され、夫れが哀はれて捨てられぬとあるが佛の御まことより言ひやうは無い。こは昨年度三心釋の御文にも

一切の群生海無始より以來乃至今日今時に至るまで、穢惡汗染にして清淨の心無し、虛假誑偽にして眞實の心無し。私共には一つもまことといふものが無い。故に、是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修一念一刹那も清淨ならざることなく、真心ならざることなし。私共が斯く不まことと考へるを以て、是を以て之を悲憫して不可思議兆載永劫の間菩薩の行を行じ下されたに、一念一刹那も清淨ならざることなく、真心ならざることなし。即ち私がまことならざるを哀はれみて、夫れ程まことに仕て下れたといふ此のまことが不可思議の佛の眞實である。其の佛の眞實と私の不眞實と飽く迄力較べして、何ちらが勝つ

私共は、毎に疑ひ隔ての根性で、佛に刃向ひ詰めに仕て居る私なのである。——又先きにも言ふ如く、私は惡るうムりますと、初めから佛に頭を下げてしまつて居るは、業報の儘てようムいますと、折角の慈悲をすかして仕まつて居るものである。其のすかし遁げ廻はつて居る私と、其の然らういふ心根が哀はれ捨てられぬといふ大願業力と力較して何れが勝つかの話である。私共は初めから煩惱惡業の儘てよろしいといふ譯けは何んなことあつても無い。其の惡業煩惱の爲め、人を恨み腹立して居る私なのである。爾るに私共の其の不まことと夫れ程迄に見過しに出來ぬとある佛の御まこと——言ひ換ふれば佛の御まことは、私の不まことの様を見て下され、夫れが哀はれて捨てられぬとあるが佛の御まことより言ひやうは無い。こは昨年度三心釋の御文にも

氷おほきに水おほし、 さはりおほきに徳おほし、
又今朝の蓮如上人『御一代記問書』の仰せでも
いつの不思議をとくなかに、盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむと候段のころを御法嘆のとき、光明遍照十方世界の文のころと、また、月かげのいたらぬさはなけれども、ながむるひとのころにぞすむとあるうたをひきよせ御法嘆候。なか／＼ありがたさまをすばかりもなくさふらふ。云云。

遣る瀬無き佛の心が入り満ち給ふなり、今迄の闇みの心が月影に照らされた明みの心となり思ひがけなき御哀みの有難やと、忽ち無明の夜があけて、我と我が手で断ずるで無けれども

無碍光の利益より、 威得廣大の信をえて、
かならず煩惱のこほりとけ、 すなはち菩提のみづとなる
又『正信偈』には茲を

惑染の凡夫信心を發しぬれば、生死即ち涅槃なりと證知せしむ。
と仰せられ、『御文』には

されば無始已來つくりとつくる惡業煩惱を、のこるところもなく願力不思議をもて消滅するいはれあるがゆへに、正定聚不退のくらゐに住すと云ふ。これによりて煩惱を断ぜずして涅槃をうといへるはこのころなり。云々。

斯くして「自分ほど悪い者はない、淺間しきは私である、今迄自分で自分をよく出來ると思つて居たが申譯けなき間違ひ

であつた、人を當てにし、同情を求め、又人がよく仕て呉れぬと言ひては不足の念を抱いて居たが、すまぬ考へてあつた、あゝよくもこれ程申譯けなき私の根性を、之をお見捨てなき御不思議とは「こやるせなき思召を頂くなり、佛智不思議て今迄の煩惱の氷解け、轉惡成善の益をえさせて頂く。以上は何やら私の經驗を話さうとして、前後混亂したやうでありますけれども、此の喜びの上より、之程有難い仰せは無いといふ自覺が、今日の元照律師の文となるのであります。

一三 甚難希有

元照律師云他不能爲故甚難學世未見故希有又云念佛法門不簡愚智豪賤不論久近善惡唯取決誓猛信臨終惡相十念往生此乃具縛凡愚屠沽下類刹那超越成佛之法可謂世間甚難信也又云於此惡世修行成佛爲難也爲諸衆生說此法門爲一難也承前一難則彰諸佛所讚不虛意使衆生聞而信受已上。

こは元照律師の阿彌陀經の疏より御引用なされた御文にて御存知の如く、『阿彌陀經』の終りに此の本願の容易ならざることをお説き下されて、

釋迦牟尼佛、能く甚難希有の事を爲して、能く娑婆國土、五濁惡世、切濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁中に於て、

ぜすー

即ち念佛の法門は、先きの法昭禪師の『五會法事讚』の御示しと同じく、如何なる愚癡なる者であらうが、有智の者であらうが、又如何な卑賤の者であらうが、豪貴の者であらうが、廣大な恵みの前には夫れ等が皆な何等の價値も無くなりて、其の愚であると思つてあると、乃至久近善惡——久近は念佛修行に心を寄するの久しさと短さとである。即ち念佛のお慈悲の前には、從來の修行の多少や、又其の人が善人であらうが惡人であらうが、其の選みが無い。こは昨年度講本大心海釋中の御文には

凡そ大信海を按ずれば、貴賤縹素を簡はず、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず、行に非ず善に非ず、頓に非ず漸に非ず、定に非ず散に非ず、正觀に非ず、邪觀に非ず、有念に非ず無念に非ず、尋常に非ず臨終に非ず多念に非ず一念に非ず、唯是れ不可思議不可稱不可説の信樂なり。喩ば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し。如來誓願の藥は能く智愚の毒を滅するなり。

と仰せられて、我々の智も愚も共に毒なのである。我々が自分分は知つて居ると心得顔に考へて居るも毒なれば、自分程惡い者は無いと泣いて居るのも毒である。然るに我々が其の智愚の二見のに止まつて居る、夫れを哀はれみ御見捨てなきお慈悲の前には、我々が自分は僅かばかりの善が出来ると得意で居るは、恰も電燈を點して明るいと稱して居ると同やうて、一度び太陽の前に出づれば、何等の用をもなさなくなる。又如何に黒闇々たる我々の心中も、一度び太陽の光が来るなり

阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に、是の一切世間難信の法を説きたまふ。舍利弗當に知るべし、我五濁惡世に於て、此の難事を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得て一切世間の爲に此の難信の法を説く。是を甚難とす。

と言はれてある。何故甚難希有の事かと言ふに、是れ程の惡しき御同やうを、之が捨てられぬとあるお心は、世の中に縋えて無いことである、世を擧げて未だ見たてまつらざる事なるが故に、希有である。又此の難有き思召を説き聞かせて下さるといふは、釋尊がお説き下されたて無くば、逆も他の爲す能はざる處なるが故に、甚難である。即ち此世に又とあり難き、又と聞く能はざる廣大の仰せ故、希有である、甚難であるとしてあります。處て斯く『阿彌陀經』に、難信の法である、甚難である、此の難に過ぎたる難は無いとあるは何故であるか。今いふ當り前では到底助らざる私である。人が呆れ、愛想をつかさべ私であるに、思ひきや其の者が如何にも可哀相で、捨てられぬとある御仰せである。故に私共なか／＼容易に之が信じられ無い。即ち「一切世間難信の法」である「難中の難斯れに過ぎたるは無し」である。即ち自分の根性に引き比べて、自分の方より信じやうとして信ずること、取つて仕まうから、非常に信じ難きことになつて仕舞ふ。今佛のお慈悲は、全然佛の方より御廻向のお慈悲であるから、之れ程頂き易きは無いに、而も斯く餘り思ひがけない廣大の仰せ故、容易に凡夫の心に受け取れないとなる。即ち佛意の不可思議が頂けぬ、といふと同じなのであります。

『又云はく、念佛の法門は愚智豪賤を簡はず、久近善惡を論

千載の暗室も忽ち明るくなる如く、遣る瀬無きお心の前には我々の愚も惡も何等の妨げをなさないのである。

一四 一念の時が命修の時

『……唯決誓猛信を取れば、臨終惡相なれども十念に往生す。此れ乃ち具縛の凡愚屠沽の下類、刹那に超越する成佛の法なり。世間甚難信と謂ふ可き也。』

一體聖人は元照律師の文を特に喜ばれたやうにて、大抵聖人が始終お用ひになる本は決まつてある。即ち『大經』の釋では觀興師の『述文讚』、『觀經』『阿彌陀經』では此の元照律師のもの、然うなつて居るやうであります。處て今「決誓猛信云云」は、『觀經』の下品下生の往生に於て、一代惡事を働いた五逆十惡具諸不善の輩が、彌々死に迫つた時、善知識が念佛を勧むる聲を聞くと雖も、苦惱極つて念佛するに違が無い。其時善友が「心で念ずること出来ぬなら、口にて阿彌陀佛の佛名を稱えよ」といふ聲を聞くなり、今臨終の時迫つて、火の車が来る其の苦惱の間に、決定して此の佛のやるせなき恵みを聞く一念に其者が忽ち十念を具足して、十念往生を遂げさせて頂くのである。即ち念佛の法門は、私の愚智善惡に係はらず、唯御見捨て無きお慈悲を聞く一つで、臨終惡相なれども其の者が廣大なるお光りの中に、思ひがけなき御救ひに預るのであるとである。處て十念往生とありても、之が必しも稱名の偏數を言ふのでない。其の一生造惡の者をお見捨てなき有難き思召と、之を聞かざる、故其の苦の者が一念に安心が得させて頂けるのである。之は『救異鈔』十四章の

仰せにも

一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふこと、この條は十惡五逆の罪人、日ごろ念佛をもうさずして命終のとき、はじめて善知識のをしへにて、一念まうせば八十億劫の罪を滅し、十念まふせば八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十惡五逆の輕重をしらせんがために、一念十念といへるが滅罪の利益なり、いまだわれらが信ずるところに及ばず……

成る程『觀經』の上品下生に於て、命終の時一念申せば八十億劫の罪を云と、一念十念の念佛の數のことを言はれてあるが、之は我々の如何程罪深き身であり、又如何ばかり滅罪の利益不可思議なる御念佛であるかをお知らせ下さる爲めに御説き下されたもので、我々の彌々頂かせて貰ふ所は、念佛の數で頂くので無い。第一死ぬ時頂く慈悲では無いのである。即ちこは、日比如何にしても心から稱へられぬ私共が、善知識の言葉の下に、平生の時頂く姿をお示し下されたもので、即ち我々は平生の時臨終を取越して頂かせて頂くのである。て今の『歎異抄』には續いて

……そのゆへは彌陀の光明にてらされまいらするゆへに、一念發起するとき金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて命終すれば、もろくの煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。

即ち私共の頂かせて貰ふは、唯口先きのお念佛では無い。斯く迄一生造惡の私を、之を見捨てぬとの廣大のお慈悲に遇ひ之を一言聞かると、もう其の時頂かずに居れなくて頂く

やつて居るからと、さう思ふて居るのが根本的の間違ひで、世間の漁すなどを仕て居る人の罪の深さは、また之等の者の罪の深さに比べると、餘程輕い。我々が日常社會上政治上等の事柄に於て或は人を恨み、陥し入れ、又は互に相排斥し合ふて、朝夕罪業にのみ惑ひぬる様は、實に魚を取るよりも人を取る奴である。物を賣り買ひするよりも、人の心を買ひ仕て居る。考へてみると、政治、社會上、自分は飽く迄正しくやつて居るとは、能く誰しも言ふ處であるが、然らう言うて居るのが既に何處迄も人を無にして行かうといふ根性である。漁すなどが淺ましいなら、政治、教育やつて居る者の方が、何れ丈けひどいこととして居るか知れない。聖人は悲歎の『御和讃』に、

よしあしの文字をもしらぬひとはみな
まことのころなりけるを、善惡の字しりがほほ、
おほそらごとのかたちなり。

是非しらず、邪正もわかぬこのみなり、
小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり。
自ら僧形を持ちて彼是れ人に言つて居るのも、名利に人師を好むものであると言はれ、又

誠に知ぬ悲哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近づくことを快まず、耻づ可し傷む可し矣。

と言はれた聖人は、屠估とは人ごとて無い、この愚禿の上であるとお喜びなされたに違はぬのであります。而して斯くの如き「具縛の凡愚屠估の下類が、刹那に超越する成佛の法なり」

信心なれば、即ち一發發起する時賜はる金剛の信心なれば、即ち其の一念にすてに定聚の位に收めしめ給ひ、其の一念に命終すれば、其時煩惱惡障を轉じて無生忍を悟らしめ下さるとである。即ち臨終惡相は死ぬときのことはなくて。即今此の仕て見やうなき奴が、廣大のお慈悲を承はる其の一念の時のことである。

「此れ乃ち具縛の凡愚屠估の下類」は、具縛は煩惱惡業に初めから首を縛られて居る我々底下の凡愚である。實に私共は、此の上なく淺間しき底下のちろかな者なのである。又屠估は、屠は殺を幸る者。即ち諸の生命をとる獵師、估は賣買ひを業とする商人。て聖人が『歎異抄』に「海河に網をひき、つりをして世をわたるものも、野山にしゝを狩り、鳥をとりに、いのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畑をつくりてするひととも云々」などあるは、皆な斯く據り所あることを、頂かなくてはならぬのである。又蓮如上人は之を『御文』の上にまづ當流の安心のをもむきは、あながちにわがころのわろきをも、また妄念妄執のころのをこるをも、とゞめよといふにもあらず、たゞあきなひをもし、奉公をもせよ、獵すなどをもせよ、かゝるあさましき罪業にのみ、朝夕まどひぬる我等ごときのことたづらものを、たすけんとかかひまします彌陀如來の本願にてましますぞとふかく信じて云々。

すると、我々はすぐ屠估とは、何か然らういふ淺間しき商賣を仕て居る人のことと思ふて仕舞ふのであるけれども、抑々我々が、學問して居るからよい、教育に従事して居るから、宗教を

一五二の難事

其の者が廣大のお慈悲を聞き、一念開發の一刹那に、三僧祇百大劫の修行を一遍に横さまに超越させて頂く成佛の法である。夫れ故に即ち横超他力の教である。故に「世間甚難信と謂ふ可きなり」——餘り飛び離れた廣大の御恵み故、容易に世人が信じ難いと仰せられたも其筈であるとの言葉である。

又今の甚難の譯け合ひを、次に、も一度仰せられて、
『又云はく、此の惡世に於て修行成佛するを難とする也』
初めの『小經』の文に於て、釋尊が「舍利弗、當に知るべし、我五濁惡世に於て、此の難事を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得た」と言はれた、此の五濁惡世劫濁見濁の世に、佛が出世して修行成佛して下されたといふが、是が一つ難事である、との意味である。又
『諸の衆生の爲めに此の法門を説くを二の難と爲る也』
同じく『小經』に、「一切世間の爲めに、此の難信の法を説く」とある、此の一切衆生の爲めに、此の法門を説いて下されたといふが、二の難事であるとの仰せてある。處て此の惡世に修行成佛して下されたといふが何故一の難事かと言ふに、釋尊は唯一應のごとて八相成道して成佛して下されたので無い、佛の本願力を、五濁惡時惡世界の衆生に知らせる爲めに、此の惡時惡世界に出て、成佛得道して下されたのであるから、即ち是れ難事である。も一つ言ふと、三世の諸佛が皆な同やうに、此の慈悲一つを知らず爲めに佛道修行して下されたの

であるから、皆な難事なのであります。そして其上より、唯
さへ疑ひ隔ての私に、此の難信の法を説き聞かしめ信をとら
せ下さるのであるから、衆生の爲めに此の法門を説いて下さ
るが是れ又二の難事である譯けてある。

『前の二難を承けて、則ち諸佛所讚の虚しからざる意を彰
はす。衆生聞きて信受せしめよとなり。』

そこで斯く『小經』で釋尊が「舍利弗我この二難をなす、是を
甚難とする」と仰せられたは、前に諸佛が二難を擧げて釋尊
を所讚せられた、其の諸佛所讚の二難を直ぐ其處へ承けて、
其の諸佛所讚の虚しからざる意味を彰はし下されたものであ
るとである。即ち『小經』の説法に於て、釋尊が此の土に於て
斯くなし下さるも、又一切の諸佛が又諸佛々々の世界に於て、
各廣長の舌相を出して阿彌陀佛の法を説き、釋尊と互に相呼
應證誠して、證據立て下さるも、衆生に「之を聞いて信ぜよ
〜」とある此の慈悲を知らせる爲めの遣る瀬無き御苦勞に
外無いとである。夫れ故『略文類』には

三世の諸の如來出世の正しき本意は、唯阿彌陀不可思議願
を説かんとなり。

三世諸佛出世の正意も、此の廣大のお慈悲の外に無いとなる
のであります。已上。(第三回夏殊求道會第二日第一席)

告

白

求めずして呼び入れて 頂いたお慈悲こそ

岡、田 龜子

此度求道誌上で告白を書くやうにと、先生からの仰て御座
いましたので、お恥しう御座います。書かせて頂く事に致
しました。私は全く如來様の不思議な御手引によつてと申す
一語の他には、何にも申上る事はないので御座います。如
來のやるせない思召が、私のやうな者の胸にとゞいて頂いた
といふ、實に〜嬉しい御喜びを一寸書かせて頂きます。

私どもの家は、お陰様と誠に深い佛縁を結ばせて頂いて居
りますので、先年近角先生の御教化で祖父も御法の有難さを
深く喜ばせて頂き、父も母も其後つゞいて信仰に入らせて頂
きまして、日頃から喜ばせて頂いて居りますので御座いま
す。て私も小供の時分、田舎に居ります時から、御寺へも連
れられ参りますし、佛様の有り難いといふ事もかねてから伺
つて居りました。そしてまた母など信仰を得させて頂きまし
てからは、猶更佛様の廣大な御慈悲をいひ聞かせて呉れます
が、どうしても自分からほんとうにしみじみ〜と有り難いと申
やうな心が起つて参りません。そればかりでなく、遂には母

はあんなに私にすゝめて、私がよくなれば御自身の都合がい
〜からだろうなど、勝手にきめて、却つてわるく思つたり
致したので御座いました。そして母の喜んで居りますのが、
何だかほんとは思はず、御稱名して居られましても、邪
魔が仕度いなどいふ心さへおこりました。

そして今年の夏季講習會の前が、大變な暑さで御座いまし
たから、若し雨でも降つて涼しい日がありましたら、参りませ
うと申して居りました。すると幸ひに開會になりました日か
ら涼しくなりましたので、二日目の日に拜聴に参りました。

遠いところから態々この會のために御集りになつた御熱心な
方々を見ますと、次の日も参らねばすまないやうな氣になり
まして、翌日も参りました。一日〜と伺つて居りますうちに

に、何やら引つけられるやうで、どうしてもあの阿闍世王の入
信のところをよく伺ひ度いと思ひまして、日々つゞけて拜聴
に出ました。そして彌々阿闍世王の入信の件りになりました
ので、一生懸命に伺つてゐたつもりなのに、後になつて見ます
と、あゝまで美しくお喜びになつた肝心の所が、分つたやうな
分らぬやうな、ぼんやりしたものになつてしまひました。この
やうな事では駄目だと存じまして、それからといふものは、一
層力を入れて伺はふと、何かつかまへにゆくやうなつもりで
居りました。つまりまだ自分といふものを見る事が出来ない
で、阿闍世王といふ方の事ばかり考へてゐたので御座いまし
た。そして最後の日に、先生はこうして折角さ〜に御出でにな
つたら、たゞさ〜だけでなく、是非信仰を頂いてくれるやうに
と御つしやいました。其時私は思ひました。こんなにまで毎日

御聴かせにあづかつてゐても、私には分らないのである、私は
まだつきあたつて見ないからだめなのであろうとたゞそれだ
けの事を思ひました。皆様の心から御稱へになる御念佛を伺
ひましては、どうしてあんな風に出るのかしら、私もとなへな
くてはならないと、力を入れて御稱名して居りました。

それから十二日に淺草で御本書をおがませて頂き猶又御開
山聖人の御手づから御刻み遊ばした御木像を拜しますと、何
ともいひしらぬ尊さ御なつかしさを感じまして、しみじみ嬉
しいと思ひました。そして御本書を拜観させて頂きました時、
一人の目のわるい御年寄の方が、御本書を先生に御手にふれ
さして御いたゞきになつて、ないてお喜びになつたのを見ま
して、私もあゝ有難いと、共に泣いて居りました。私はまた私
のやうな信仰のないものや、御信仰をふかく喜んで御出にな
る方や、高きもいやしきも、老人も若い者も一切平等にこう
した一つの御席にたらならして頂いた事を、誠に嬉しく感じ
まして、猶更自分の信仰のないのが恥かしく、肩身せまく思
はれてなりません。こゝまで思つて参りましたが、ま
だほんとうに自分といふものに氣がつく事が出来ませんので
したが、家にかへりまして、家内中で夕食をすませまして、
食後色々今日の有難かつた事ども、祖父や父に話しを致し
て居りますうちに、ふと心づかして頂きました。今まで如來
様は遠いところに御出になるやうに思ふて、こちらの方から
眺めてばかり居りましたのでしたが、それは全く間違ひで、
もう生れぬ前から常に〜側に御出で下すつて、佛の方から
こゝにゐるのが分らぬかと仰しやつて、呼びづめにしてゐて

ふところが頂けて居ると思ふている人も、問ひ詰められてみれば動揺するのであります。實際問題から云ふと空になりて分らぬ、そこでどうぞ此れから御質問なさるに就いても、可成實際問題を提出して頂きたい。幸ひこゝに御出でになる澁谷氏は、今日晝の席にて御話した、先達て自轉車に觸れて怪我をさせられ其時は一時腹を立てられたれど、直ちに我身のわるさに心附きて御慈悲を喜ばれたといふ御本人であります。先づ此方の當時の様子を皆さんに御話しして頂きます。

澁谷氏、私は今先生から御話になりました通り、過日某所にて、自轉車にうちあてられ、此通りの負傷を致しました。が、其時先方が却て私の不注意を罵りました爲、私も非常に腹立てつゝ二言三言口汚く争ひましたが、先方が私の怪我を見て大に濟まぬと思つたか、今度は大に頭を下げてあやまりましたので、私も心が解け、傷はいたみまされど、もう少しも腹も立ちませぬ、そうして若し先方が私の起き上るまでにあやまつてくれたなら、あんなに腹もたゝなかつたらうにもと思ひ、聊かのことに、かれこれ順悲や愚痴をおこす、私の實情を見せて頂き、有難く喜んでをります。

某氏 雜行とは如何なる意識なりや。

○雜行とは、正行に對した名で、これは善導大師が讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚嘆の五つを五正行と名づけられてある。然るに、又この五正行の中稱名を以て正定業となし、爾餘を雜修と申してある。如來の本願は念佛の一行であつて、其他に或は經を讀み、佛を觀する等の事はわるい事ではなけれど、此等を自分が助かる爲と思ふてするならば、即ち雜修と

しき衣物を着らるべき身てなきことを知り通して下されたからである。今晚は青年の方々も多きやうなれば特に申すのであります。一體宗教とは何か、相對と絶對との一致であらう。然るにこの一致に至るに二道ありて、一は相對を磨き上げて絶對に達するので之れを自力といふ、即ち大奮發心をおこして、坐禪や戒律を行つてゆくのである。處が念佛はどうかと云ふに、念佛して一歩々々進んでゆくと云ふならば、矢張り座禪や戒律と一様になつてしまふ、今なぜ念佛が下へ向つたかと云ふに、選擇集にこれを委しく述べてある。其の要は、我々は造像記塔も持戒持律も其の他凡ての行が叶はぬに依りて、阿彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されて、此等一切の行を撰び捨て、稱名の一行を以て其の本願とし給へりといふのである。如何なる行もなし得られぬ我々に、佛が自から回向し給ふの念佛である、夫れ故自力と他力とは正反對である、即ち佛は我々のかゝる罪深き有様を觀はし、それだから駄目であると仰せらるゝならば佛と我々の關係は絶えて仕舞ふのであるが、罪深ければ深きだけ、一層可愛相であると御見捨て下さらぬ御喚聲が念佛である。しかし、それならば我々はその仰せに従ひて一心一向に念佛するのかといふに、それはたゞの從順である、一心一向とは決してこちらの誇りではなくして、我等の力の及ばぬが爲めである。丁度病人が危篤に陥つて、如何なる薬も其効がないといふときに、最後に此一服は汝如き危篤の病人に吞ませる爲に態々作つたものぢや、さあこの薬を飲めと言はれたとき、それでは思召しに従ひ飲んで見ませうではない、こう云ふものを助けん

なるのである。この念佛一行といふことが頗る意味の深い事であるが、誰もこの眞の意義を頂く人が稀である。現に某地方では念佛の一行であるといふて、佛壇を飾ることするも廢する流義があるが、これは形ばかりとりたる誤りである。聖人の念佛はかゝる意味ではない。今少しくこれに就いて述べ見よう。善導大師の散善義の文に、一心專念彌陀名號、不問時節久近、念々不捨者、是名正定業、順彼佛願故とあつて法然聖人が四十三歳のとき入信せられしは、不圖この御文に出合はされたが爲で、これより善導流の念佛が始まつた。されば法然聖人はたゞ念佛を稱へられたのではない、この念佛は彼の佛願に順ずるが故である。このときに聖人は直ちに本願に目を着けられた。凡そ淨土の三部經は昔しから讀まれ乍ら、本願が生きて來たのはこゝに始まるのである。私が始終申すことであるが、それ迄の念佛は親さがしの念佛であつた、然るに法然聖人の念佛は親を求め得た後の念佛である。法然聖人を念佛の元祖と云ふは、聖人の以前にも永觀律師其他念佛者は多かりしも、念佛の眞意義を説かれたは法然聖人である。但し法然聖人の直流である今日の淨土宗では、吾々は専ら念佛を稱ふべきである。これ即ち彌陀の本願に従ふのであると説く。これは親の仰に従順なる善人たるに過ぎない。そこで先づ法然聖人の撰擇集を見ねばならぬ。何故に佛が念佛一つを稱へしめ給ふのであるか。なぜ手織の衣物一枚を與へ給ふたのであるか。念佛一つを稱へしめ給ふのは外のいかなる修行も及び難き身であることを御見ぬき下されたからである。手織の衣物を與へ給ふたのは、我々が逆も外のうつく

との仰せを聞いて、あゝ我はもう逆も助からぬ病人である。地獄は必定住家である、この私を猶もそのように遣瀨なく言ふて下さるのであるかと氣附いて見れば、如何にも其御親切の深い處が有難いとなつて、最早癒る癒らぬには心がかゝらぬやうになる。これは從順ではなく信順である。教育上でもたゞ教師に服從して居たり、從順である丈ではなんにもならぬ、如何にも先生の親切が有難いとなつて始めて其効果があるはれる。故に一向一心といふことは罪惡觀である。又信心爲本といふことも始めてこゝに開かるゝのである、そうして一旦この御慈悲を頂いた上は、さきに申した御經を讀むも、佛を觀するもすべて御報謝となり、他力の行となるのであります。

序で乍ら申せば、この專修と雜修と云ふことが頗る興味ある問題であります。眞宗の念佛者は、往々雜修をやれば佛の御氣に入らぬなどと申すのである。これは、これを一方から云へば、如何に信條に忠實であるかといふことが分るのである、抑も眞宗に於て雜修を戒められたは覺如上人に始まる、覺如上人は箱根にて善戀上人より病氣平癒の御符を授けられたとき、目を瞞らしてうち棄てられたと傳へられ、又蓮如上人は善戀上人の御寺の前を通るとき面を掩ひて、見向きもされなかつたと云ふことである。さり乍らたゞ雜修がいかぬては譯が分らぬ。彌陀一佛をたのみて諸佛をたのみといふのは、諸佛が悪いと云ふのではない。つまりは未だ眞實我身が悪いと氣附かぬ故である。夫故一方には諸佛菩薩を疎かにすべからずといふ教へもある。こゝに諸佛法と、彌陀

法との分れが生ずる。今日の吾々は諸佛の教にては逆も助からぬに依りて、彌陀の救済があらはれた。しかし諸佛とても一切衆生を助けたいは腹一杯でまします、夫故今彌陀の名號絶對の救済があらはれた以上、どうしてこれを喜ばずに居給はずに居給はうや、何れも口を極めて之れを讚嘆なされる。こゝを以て彌陀經和讃には「恆沙塵數の如來は、萬行の少善きらひつゝ、名號不思議の信心の、ひとしくひとへにすゝめしむ」とありて諸佛は自分の教への萬行諸善を忌みきらひて偏へに彌陀の名號をすゝめられるとまで仰せらるゝのであります。この見地から云へば、彌陀は一切諸佛の本地本佛であります。諸佛彌陀に代はりてこの念佛を御すゝめ下さる方となるのである。かの有名な平太郎熊野參詣の一段も此意味で明瞭となるのであります。前年廣島縣高田郡の郡書記で日比信仰を喜ばれつゝあつた人が、先帝御不例の時、土地の神社へ御平癒祈願の爲參拜すべきを命ぜられ、どうも自分の信仰と矛盾をして譯がわからぬ。手次の坊さまに尋ねられた處が、其坊さまは、平太郎さんの眞似をして行けばよいではないかと答へられたさうであるが、しかしそれでもどうも承知が出来ず、ともかく其場は、二重橋へ御見舞にゆく積りになつて參詣したと、後程私に話された事でありました。私はそれに答へて成程平太郎の眞似は結構なるが、しかし、平太郎の熊野參詣は、世間普通の儀にならふといふ便宜主義ではない、特にあのときは聖人より懇々と念佛の謂れを御教化ありて、たゞ本地の誓約にまかせて、念佛しつゝ參詣せよと御示しあらせられた、即ち熊野へ參するも阿彌陀佛に詣づるも、畢竟同じこ

とよなるとの思召である。と申した次第でありました。猶この意味の事が現代の問題に活用された御話を申せば、嘗て大逆事件や南北朝問題の起つた年、文部省に於て倫理の講習會を催し、色々道徳上の訓示があつたのであるが、この時福岡縣師範學校の教員某氏亦この會に出席され、此等の訓示を聞かれた處が、平生の信仰上の立場から考へて、どうも腑に落ちぬ事が多い。そこで此方は極めて眞面目な方でありましたから思ひあまりて一日愁然として、私を訪問せられ、右の次第を語り、且つ自分歸校の後、此等の訓示を報告し、又率先して之れを遵奉せねばならぬとなれば、到底辭職するの外なしとの御話でありました。そこで私は、いやそれは決して辭職するには及ばぬ、私の思ふ所を遠慮なく申せば、あなたは歸校して先づ文部省の訓示を一部始終忠實に報告し、扱其後に至りて、併し自分は信仰の立場から、斯様々に考へると批評を加へられたらよからう、何も文部省を相手とするには及ばぬ、あなたが辭職をなさうといふ御考へはさることながら、それでは却て教育に忠實なるものとは云へぬ、聖人の御時にも、關東の御弟子達が念佛の答によりて、鎌倉の問注所へよびだされた時に、聖人よりこの御弟子達に賜はりし御消息に、有名な「朝家の御爲、國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらば、めてたくさふらふべし」との御言がある。此れは、世のさかしま事をうらみとせず、却て其さかしま事の世に禍なかれと祈れといふ、實に意味深長なる御教化である。今あなたも此等の次第を深く御考へになつた方がよからうと御話した處、其方も大層喜ばれ、早速歸校の後私

の申した通りな報告をされたさうであります。かの三教會同の如きも、上述のことと立場から見ても、到底これを許すことが出来ませぬ。併し又人生はこの佛力一つで必ずゆく所までやらせて貰へるのであります。すべき政治も、教育も、實業も、其儘ではゆかぬが、一旦これを打破りたる後に、かゝる不實なるものを見捨て給はぬが有難しと云ふ立場よりやらせて貰らへば、自ら眞の政治、教育、實業が現はれてくることと思はれます。

某乙氏 (教育家) 眞宗の信者中には、俗諦門に就いて、尙多く誤りたる考を持つ人があるやに思はれます。

○俗諦門に誤れる考を持つる人は、未だ眞諦の信仰が十分ならぬ故であります。これ等の人々の考には大體二通りあつて、即ち眞諦門は悪いものを助け給ふのであるから悪うても構はぬと云ふのと、又眞諦門は悪いものを助け給ふのではあれどこの世の目暮には成るだけよくせねばならぬといふ、この二つであります。これは決して古い問題ではなく、今日青年の活問題である、吾々は悪くともよいと云へばとて其れで安心はならず、又よくせねばならぬと聞いても、實際よくすることとは出来ぬ、されば如何にするか、嘗て或る僧侶の方が、自分僧侶であるから、最も立派な行をせねばならぬと考へ、清き理想を描きて猛進せられつゝあつたが、しかしそれが時來りて、逆も實行が出来ぬ事が知れて來て大に苦しまれた。かゝる場合に臨んで、あなたは、悪くてもよろしいのであると、又は矢張りつとめてやらねばならぬと言つた處で、それだ安心が出来やうか。そこで私はかう申した、いかに、出来

ぬとなれば御苦しいでしょう。しかし佛は我々の道心も起らず、父母孝養も出来ぬ、そのして見様なき點を哀れみ下され、それが見捨てられぬと仰せ下さるのであると申した處、其方はたゞ一言で御慈悲に徹して下さい、大に號叫して喜ばれたのであります。又我々は悪くてもよいといふのではなく、飽迄惡を避けて、善につかねばならぬのであるが、併し佛は我々のどうしても、その出来ぬ事を御見抜き下されて、如何にも可愛相である、見捨てられぬと遺頼なくいふて下さるのである、福島縣の某富豪の方が、平生極めて嚴格に其愛子を教育せられたが、子供は親の心を知らず、かつて某處にて、流行的な華美な物品を求めて歸つた、すると父は大に怒り、かやうな物品は汝の所持すべきものでない。將來の戒めぢや然らぬといふことには汽車賃はやれぬからこれから遠くとも其町まで歩いてゆき、元の店へ返してこい、と、握り飯をもたして突き出されました。そこで小供は止むを得ず、家を出て行きましたが、後に主人は其妻を呼び、子供は出かけて行つたが、お前は汽車賃をやつたかときかれた。處が家内の方はいえ、先程からの御言葉もあり、そうしてはわるいと思ひ、何も持たせずにやりましたと答へられた、すると主人は大聲一喝馬鹿めいと却て家内の方を叱られたと申すこととあります。叱る下から可愛や不便やの思の起るは親の情であります。悪うてもよいといふ御思召ではなけれども、其惡のやまぬところか一層不便であると御見捨て下さらぬのである。經文に唯除五逆誹謗正法とあるは、釋迦の抑止である、されど愈々これを犯したものがあれば、それが餘計に可愛から、攝取し給ふのが彌

陀の本願であります。

扱今晚は圖らず話しが説明風になりて、一般に御わかりよ
くはあつただらうと思ひますけれど、又實際問題に苦んで御
出でになる方には、物足りなく御感じになつただらうと思
ひます。しかし時もうつりましたから、今晚はこれから定め
の通り佛前御禮を上げた上、散會することゝ致します。

第一一席 (七月六日夕)

某甲氏 (多年開法に心懸られたる横濱の一人) 私は多年御開かせ
に預りますけれども、どうも重荷を仰した様な心持ちになられませぬ。

○あなたの御尋ねは、そうではないでしようけれども、從來
多く御説教を聴聞せられた方は、往々「御慈悲はたゞ」である
とか、「この儘乍らの御助けと喜んで居ります」とか、消極的
のみを言ひて安心して居る言ひ方がある。あなたの若しそ
れであるなら私の言ふ事がきかれぬ、私の念を押すのはどう
かして御慈悲を徹せしめたいからである、よく人が、あなた
の言ふごとく、永々聴聞するが重荷が下りた心になれぬとか、
どうしても得られぬで困るとか訴へらるゝのであるが、それ
が本當に光りを認めたいと言ふのなればよけれども、大低な
處まで分つて居るが、もう一部だけわからぬと言ふやうな
所にとゞまりて、今が今、仕て見ようがないといふのではな
く、たゞ口先丈でかやうに述べらるゝ事が多い。あなたの若
しやそれではありませぬか。

某甲氏 私はこの少しの感じもないものを、可愛想といふて下さると

は、有難いと存じては居りますが

○もう佛様がある以上は、それで十分ではありませぬか、そ
れが猶も不審とはどういふことですか。

某甲氏 ……………

○あなたには、此方から如來に向ひて居る態度である、かゝ
るものを御見捨てなしと我心できめて居らるゝ丈で、本當の
親様がどう云うて居られるかまだ届いて居らぬ。此方から
彼此思ふのは皆作りものではありませぬか。

某甲氏 仰せの通りで御坐ります。

○そうするとそこで切らねばならぬ。あなたのあとをつける
のが誤りである。あなたとしては、そう云はるれば仕方がな
いと云ふ丈がのこるのではありませぬか。

某甲氏 今迄の持物が昔からになりました。

○あなたの一言から言へば、多年あなたが佛法々々と言うて
居られたのも、佛をおもちやにし、人をたばかりで居つたの
ではありませぬか。今迄多年喜んで居つた事は、あなたを壓
しつづす荷物となりたるにはなきか、それは私も其經驗が
あればこそ申すのである。此間も或る方が尋ねられた、私
は其人に對して、今迄あなたが筆にかき、口に述べられし處
は、愈々今日となると作りものとなるぢやないかと申した處
本當に其通りであると申されました。

某甲氏 私は全く自分を欺いて居りました。

○今日迄はたゞ人によく思はれたいと云ふことのみである。
こゝまで言ふと今迄のものが皆消えて仕舞ふ、處が今本當
でないものを活かして置いてはならぬ、自分は如何にも仕て

見ようのなきものだ、たゞ夫れ丈に止まつて居つては、次
の處へ移れぬ、そうするとあなたは全くまことのなきもので
ありませう。されば今後聴聞せうとも、何をせうとも明るくな
る筈がないでありませう。これも念の爲に申しますが、聴聞
に念を入れると云ふことはよきも、我々は間違はぬやうに聞
かねばならぬと云ふて計り居る人がある、これは聴聞計りに
頭をつつこみ居る人で、それでは中々信が得にくい。あなた
もこれからどれほど十分聴かれても、うそのものはいつまで
もうそで駄目である。そうするとどうか。それ程の誠でない
偽り計りの私共と氣が附いて見ればもう自分としては何とも
仕て見やうがない。然るに若きや若し、其誠ならぬものを見
捨てられぬといふ人があつたらどうか。あなたは今迄そう云
ふ誠ある人のことを聞いて居られたか。あなたの誠になれぬ
事を見抜きて、其誠になれぬものが見捨てられぬといふ人が
あつたらどうか。解りませぬか。そう云ふ人に對して、
やはり私は誠になれませぬと云へるかどうか。その誠でない
ところが見捨てられぬといふ御まことが今彼方の方から向う
て下さるのであります、どうですか。もしまだ受取られぬな
ら、其受取られぬ處を御遠慮なく申して下さい。

某甲氏 そこまでばかりですが、しかし、どうしても此方から佛に

向ふやうになります、どうかして本當のものになりたいと思ひます。

○本ものになりたひと言ふが間違なり、偽物は飽迄偽物でほ
つて置きなさい。其偽物を以て得意になつて居るやうなまこ
とならぬもの、それは佛がちやんと御存知である。あなたは
偽物であるからほんまものにしなさいと思ふだらう。あなたは

如來様はかゝるものをといふときは頭を下げることと思ふて
あらう。そういふことを佛様はいかぬと云ふて下さるのでは
ない。もし刃向へば刃向ふものをあはれと見て下されたらど
うしますか。

某甲氏 それでは向ひ心も何もいらぬのであります。

○あなたは消極計り云ふが、いらぬかいるか位の事ではない、
借金をなしてやらうと云はるゝに、それなら借金はなさぬで
もよいかでは力が弱い。まあ此程のものをその様に迄御親切
に言ふて下さるかと思ひてなくてはならぬ。

某甲氏 私は矢張り刃向つて計り居ります。

○刃向つて居た丈悪かつたと云ふことになるぢやありませぬ
か。

某甲氏 私は手が打てるものぢやと計りに思つて居りました。

○それは打てる。大に打てる。あなたはどうしても消極ばか
り言はれる、もう此方は手がうてぬのぢや、打ててもいの
ぢやといふ從來の心持ちにかへられる。大に手が打てること
ふてよろしいのである。

某甲氏 どうも自分のものになりませぬ、……………そうして、そのなれ

ぬといふことを御承知の上と云ふことも矢張り、自分の心で作つて居る

やうで御座います。

○まあもう少しよく聞きなさい。(かくて婦人席の某老女に
向ひ) 御婆さん此頃はどうかありますか。

老女 御座る有難うございます。

○あなたの御心持を言ふて御覽。
老女 どうにもこうにもならぬ、今死ぬるとなると恐ろしくて堪まら

ず何邊聞かせて貰ふても少しも明くなりませんでした。然るに此のどうにかうにもならぬ處が可愛相との仰せが泌み／＼こたへまして、有難く喜ばせて貰ひます。今日も前の心が出て参りますが、思ひ出させて貰ふては樂にして頂いて居ります。

○どこで安心が出来ましたか。

老女 願力の不思議といふ事が有難く思はれます。

○御不思議とはどういふことですか。

老女 見捨て給はぬといふがどうも何とも申されませぬ。

なにが御不思議ですか。

老女 この儘助けてやると云ふ仰せが、たゞ不思議でなりませぬ、今迄まだ何かある／＼と思ふておりましたに、只この儘といふ處が如何にも御不思議と頂いております。

○今迄苦んで居られし方が安心しておられるを見れば頂かれたのでありましようが、誰れでも不思議といふことはきいて居りても夜が明けぬ、たゞ口先丈ではいけません。極々、大切な處であります。

○御不思議に夜が明けぬ前には、反對に考へる處が一つある。即ち有難く受けられたらばと考へる。しかしそれはどうしても受けられぬ。御慈悲の方では有難く受けられぬものが、一入可愛相なのである。(更に先きの老人に向はれ) あなたの胸に有難くなるのだと思ふて居らるゝがそれは出てこぬ。又出てこぬからいかぬと心配される。私共は元來親に背きて逃げようとして居る。それを親の方では親を蹴りて逃げるものが一層可愛想といふのである。

某甲氏 それは承知して居ります。

してはなにか。

某乙氏 私も多年信仰に心掛けて居りながら、聞いても／＼わからずさればとて止めにもならず、これが私の有様であります。たゞ常にどうも少し進みたい／＼と計り思ふております。

○今日の講話に二河白道の事を申しましたが、所謂、行くも亦死せん歸るも亦死せんとは今のあなたの境遇のさまを仰せられたのはありませんか。そこで聞くべきは西岸上の喚聲である。「汝一心正念にして直ちに來れ我よく汝を護らん」汝とは其境遇をぢかに押へての御言、直に來れだから自分でもうするでもこうするでもない。如來はよく見抜きて見すてられぬといふが一心正念の御よび聲である。あなたが今度遠國より御出てになり、今この席に臨んで、進むも退くもならぬといふ心の中を、無理からぬ事と思召して、そこを可愛相おやと見て下さる御慈悲である。出來ぬところが可愛想と云ふて下さると云ふことが有難いではありませぬか。なぜそれで氣がすみませぬか。

某乙氏 あはれちや丈ではどうも満足が出来ませぬ。私ばもつと悪いといふことが知れたら頂かれようと思ひます。

○そのやうに自分の考へをたてとほさうとするところが間違である。横濱の御老人は道樂で困るとなげかれあなたは又もつと道樂したら親の慈悲がわからうと思ふて居らるゝ。御老人如何ですか有難いぢやありませんか。

某甲氏 いや何とも不足の申しやうがありません。

○不足の申しやうがないのなんと云ふ位ぢやない。よくもこれ程のものを御見捨て下さらぬが有難いのである。

○それは承知して居りますとは、向ふ様の御好意に對して大に背く。併し私はそれをいかぬと言ふのではない、無理からぬ事であると思ふ。佛様はあなたの其性分迄を御存知で、遣瀬なく仰せ下さるのであります。あの御老女が先程、今迄は喜ぶたいと思ふて計り居たに、此儘なりの御助けとはさても不思議やと頂いたといはれた。喜ぶたい／＼ではいつまでも御慈悲が聞えぬ。その喜ぶことの出來ぬ私を可愛想ぢやと仰せ下さる、如來の御慈悲は私の悪い丈それ丈深きなり。私は悪い計り、それを飽迄御見捨て下さらぬが御慈悲である。

○(一同に向はれ)此御老人は毎日横濱から徳々御來聴になる方て、かの越前の柴田氏と御知合で、多年某高僧について法をきかれたのであるけれども、どうにも消極一偏におちて極の御慈悲があらはれて下されぬ。此御老人に對し甚だはげしく申上げて失禮とは存じますが、この方のような不審を持つて御出での方も多くありますから殊に力強く申したのであります。

某甲氏 段々の御聞かせに預り、私がどうもこうもして見ようのないことわかりました。

○やはりあなたは結局元の處へ御歸りになる。そうして見ればもう結局あなたは駄目ぢやありませんか、今死ぬるといふそのときには、どう思ふもするもないではありませぬか、あなたの其點がいかにも可愛想ぢやと御見捨て下さらぬ御眞實が如來様であります。

某甲氏 わかりました。

○あなたはわからうとするからゆかぬ。何も考へる餘地がない。

某甲氏 今日迄親様の訓があたらないて來たのは不思議であります。

○それは今日迄ぢやない、是程淺間敷ものを御見捨て下さらぬときけば、一念に於て御不思議ぢやといふ外はない。

某甲氏 心配するのは無駄であります。

○それ位ぢやない。

某甲氏 先生の仰せは分つて居る、そうしてそうてなくてはならぬと思つております、どうもそこが

○やはり同じ事を繰返して居らるゝにすぎぬ。あなたはわかつて居るといへど、實は少しも解つて居ない。それ故こちらに云ふことが届かない。

名倉氏 側て承つて居れば、老人はか自ら僞筆のものか所持し乍ら其れを僞筆と思はず、眞筆を示されてもそれと見較べて居らるゝやうに思はれます。

○四國の丸尾某氏のごときも、自分が悪いといふ處まで氣はつきて居乍ら、悪い／＼をくりかへして、其れを見捨てぬ親様の御慈悲を喜ばれることが出來なかつた。どうしても佛教には消極と積極との二面があつて、たゞ積極一邊の耶蘇教と趣きを異にして居る。はじめから敵を愛せよのなんのといふても、吾々の消極の悪い心が外面へはあらはれぬにしたところ、心は中々にそうなつてこない。しかるにこの悪き心を飽迄御見捨て下さらぬことの有難やと頂くときには、たとひ人が五分五分で向ふて來ても、それをわるくおもはぬのみならず、萬が一無理を云ふとも、それは信仰を得る人なれば尤のことであると、憐みの心をさへ生ずるやうになるのであります。

諸の如來と等し (前號に續く)

(第二回 變信會) 近角 常 觀

善の欲しきはまは眞實が聞えぬ故

四五 さて之に就き、茲に皆様に是非聞いて頂き度い話がある。昨年大分に参つた時、別府で大に信仰の起つた事があります。それは其時私は別府に参つて、眞俗二諦の味ひにつき、お話しした。夫れは從來此のお慈悲を聞かれるに眞諦門の方では何のやうに悪しくてもお助けと横着な頂きやうをしてる人が幾らもある。そして夫れ等の人が、斯う頂きた上は、俗諦の上では何處迄も善くして行かなければならぬのであると、何うしても吾が身の善から手が放なせぬは、また本當に眞諦門のお慈悲が頂けて無いからぢや。眞諦門の方で「悪しくてもお助けである、こんな者でもお見落しが無いのぢや」と。輕いことに頂いて居るから。又もとの地金が俗諦に出て、「此の上はどんなにでも善く仕て行かんならんに、夫れが何う仕ても出来ぬ」といふ歎きが再び出て來ることになる。

四六 處が如來の仰せは然うて無い。其の俗諦の何うしても守れぬ處が可哀相ぢや」と仰しやるに、何時迄も出来ませぬ」が出て來るは、また本當に眞の仰せが頂け無いから

四九 處が之は昨年のことであるが、昨年は折なくて御目にかゝれなんだから、今年遭うて見た。遭うて私が一つ不審を起したといふは、其の婦人が非常に喜ばれて、「私がこんなに喜ばして貰うて居りますと、人様も喜んで下さりますけれど、人様はそんなに喜んだら、もとの家へ歸へれさうなものだと言つて下されませぬ……」と、何氣なく言はれた此の一言であるも、此の一言が耳にとまり私は氣になつた。

五〇 そくて私は「それであなは何う思はれるか」と聞いて見た。「矢張り何うしても歸へれませぬ」と言はれる。私「それはなる程信仰前は然うもあつたらうが、今では歸へる氣が出ぬか」と言うて見た。矢張り「何うしても行けませぬ」と言はれる。私「いや、行かんならぬと強いて言ふては無けれども、併し今となりてはあなた心中に濟まぬことだ、歸る可きことだと思はぬか」と言うて見た。やはり何處迄も「出来ませぬ」と言はるゝのみにて、何うも其の出来ぬ處が可哀相だと思はれる方が、まだ不充分な處が有るやうに思はれて仕やうが無い。

五一 夫れから段々話がひどくなつて來て、最後に私は、「あなたは自分は歸へられぬけれども、此の歸へれぬ處を可哀相だと仰しやつて下さるのだ、といふては満足して居るのぢや無いか」と押しつめた。すると餘り私がひどくいふもの故、もう向うは笑つてしまつて、「先生の仰しやる處はよく分つて居るのです」と言はれる。後にはもう言葉がなくなつて「私のやうな奴は到底信心頂いたなど言へませぬ、俗諦門が出来ないのですから」など、言はれる。「世間では大方然う思

ぢや。然るに佛は「汝の共の出来ぬ處を可哀相と見たのである、其の俗諦の守れぬ處が哀はれてならぬのぢや」と、この仰せが實に一應二應で無い。私がやればやる程出来ぬにつけ、行へぬにつけ、彌々益々其上々々と、飽く迄お見捨て無き仰せである爲めに、遂に如何な私も、其の廣大な御親切の下に頭が下り、腹から満足させて貰うて、日暮し出来る有様が、眞の俗諦門の味ひであるとお話しした事である。

四七 處が其時御來聽下されてあつた或一人の御婦人でありませぬ。當時既に「求道」に告白が掲つたのであるが、其の御婦人の御主人なる方が非常な放らつな方で、金が出来ると直ぐ費つてお仕舞ひになる。金が出来るとすぐ清國に渡つて流浪し、漸く家政の整理をつける又歸つて、持つて行つて仕舞はれる、如何な婦人も遂に辛抱がし切れなくなつて、小供があるに、とうと離縁になつて仕舞うた、併し久しく御法義に心がけて居らるゝ方故、然うなつて居ながらも、自分が俗諦のやり通せぬことを非常に苦にしてお出になつたのである。

四八 處が然うある處へ、今の俗諦の行へぬことを、其處をお見捨て無いと聞かれたの故、非常に喜び下された。殊に私の話の中に、「陛下の御勅使が、臣百姓の災難を哀はれんで態々お見舞下さるに、斯んな難儀な者の處へと言つて居ては却つて御満足下されぬ。其の難儀なお前だから、捨て置けぬ故態々訪ねてやるので無いかと仰しやて下さる」と言うを聞き、此の俗諦の守れぬ私故、之をお見捨て無いのであるかと、人目に立ち著しく喜び下されたのであります。佛のお慈悲は唯可哀相とあるだけか

うのでせう、夫が私に不實だから、私も不實に仕てると、然う思ふてるのでせう」など、言ひ出される。益々以て私にはよろしくなくなつて來た。

五二 其中私の話が彌々ひどくなつて來たものだから、周圍の人が皆な「先生は事情を御存知無いからだ」と、見兼ねて辯護を仕出されるやうになつて來た。周圍が辯護をされれば、さる程私の方は彌々ひどくなつて來る。然うなると私の方も何ういふのか一寸見當がつかぬ程になる。殊に其方が女ながらも頭が明晰で、能くテキパキと「私は俗諦門が守れぬのが苦になりて、仕やうが無つたに、夫れを哀はれと仰しやて下さるお慈悲と承はり、有難くて」と仰しやるのをきくと、一寸考ると何處に悪いところがあるのか薩張り分らぬ。其の中にあたりの人皆な向ふ側になつて仕舞つて、私が何か誤解でも仕てるやうなことになり、私の方が却つて立場がないやうな有様になつて來た。

五三 とうと翌日になりて、最後に私の方が何を言ひ出したかといふに、「一體昨日からあれ程迄に私の方から言ふに、之に對するあなた昨日からの聞きやうが氣に喰はぬ。私の方は去年あなたが私の話で喜ばれたからこそ話して居るに、そのことならもう分つてるといふ聞きやうでは、ちとひど過ぎるぢや無いか。去年のであなたが本當になつて居るなら何も言やせぬのであるけれども、萬一本當に御信心が徹して居ぬ時は大騒動と、案ずればこそ私の方は言ふて居るので無いか。爾るにあなたの昨日からは、失禮ながらしつくり私の話を聞く態度になつて居らぬ。本當に私の話が分つて居るな

ら「如何にも然うてムリです」と、下から受けて出てもよさうなものではないか。然るに昨日から私の方は生命懸けて之れ程多くの時間を費して言うてるに、あなたの聞きやうは宜敷く無い。」ととうとう向ふの言葉を押えつけて仕舞うた。

五四 すると向ふも不審が立つたやうで、「然う仰しやられると何やら今迄お慈悲のことを浅く頂いて居たやうでありませぬ」と言ひ出された。そこで私「昨日から私の方から何か言ふと、あなたはテテハキお慈悲のことを言はれるのであるも、併し何時も最後は「私は俗諦が行へませぬ、併し行へぬのを哀はれと仰しや下さるお慈悲と承はつて」といふのが、あなたのどん詰りになつて居る。するとあなたのは唯可哀相と言うて下さる丈けなのか」と突きとめた。

五五 之には其方も非常に驚かれた様子であつたので、私は「佛のお慈悲は、私の不實が唯可哀相と言つて下さる丈けなら唯一應のお慈悲であるも、其の不實が捨てられぬく、其の爲め五劫永劫の御苦勞があるので無いか。如何程不實な私であつても、其者に對し飽く迄捨てぬとある佛の眞實であるので無いか。あなたでは、唯不實が哀はれと言ふ丈け仕舞ひに仕て居られる如來様になつてある」とお話した。

五六 其の中に其の方は泣いて仕舞はれて、もう物が言へなくなり、其の日は其儘歸へられたのであつたが、翌日來られた時は、はや様子がすつかり變はつて居られる。申さるゝには「全く私が悪うムりました。第一には佛に對し申譯け無く、第二には一昨日來私に對し、先生の斯く仰しやるは、私の頂いてるところを先生が御存知ないからだとばかり思つてまし

へれぬは第二として、兎に角自分が出て居たのは申譯なき誤りとなつて來るのである。處が之が此の方ならこそ能く聞いて下されたのであるが、之が中々世間一應だと分らぬ。一應自分がよいことが出來ぬをやるせなく言うて下さる位のことですまして居ると、矢張り自分はよく行へないが、行へないのがすまぬ處ぢや位の處で片つけて置くやうなことになる。

五九 すると此の時話の中に色々の例が出たのである。よく淨瑠璃にいふ蓋坂寺の澤一が、妻に氣を措き、崖から身を投げた話である。處が澤一の女房にする時は、夫が目が見えぬばかりに色々自分を疑ひ隔て、遂には落膽してそんなこと迄する、夫れが氣の毒でならぬから何うしても夫を捨てられぬのが妻の眞實である。故に夫が飛込んだと知つたら、自分もあと追うて一緒に飛込んだ仕舞うた。すると思ひがけなく御利益で、二人とも蘇へり、夫は目があいて始めて疑ひがはれ、妻の眞實に泣き伏したといふのである。即ち之が一方の不實が何うしても捨てられぬといふ眞實の有様である。斯く私が目か明かぬばかりに色々佛を疑ひ隔て居る、夫が哀はれ不便で如何にしても捨てられぬとあるが、佛の廣大の眞實でましますのである。

六〇 すると茲で自分は斯く不實で仕やうがないが、夫れを向うは可哀相と言つて下さるのだ難有いで、いつ迄も自分は不實で失望仕切居る丈けでは仕やうが無い。之を初めの夫人を先立てられた方の上でいふ時は、往かれた方の思召は、「自分は斯くお慈悲一つで満足して往かせて貰ふから、あなた

た」と語り、深くお喜び下されたのである。私も「成る程然うであつたてせう」と申し、共に喜ばせて頂いた事であつたのであります。

不實の奴が不實の儘で居られぬやうになる

五七 私もあとと思ひ反すと、随分思ひ切つたことを申したものである。仕舞ひはこんなこと迄申したのであります。或る、病氣の夫を持つた女があつて、とうとう世話が仕切れなくて、夫をよそへ捨てて行つた。或時女が自分の家の石垣を崩すと、一びきの守宮が居つて、頭を釘づけにされたまゝ生きて居る。よく見ると幾年前かに釘づけに仕た守宮なるに、唯の守宮が始終側を離れず、食を取つて來てはやつて居た爲め、幾十年かを生きて居つたのである。其女は之を見て心に深く前非を悔み、夫をつれ歸つて最後迄世話をしたといふ話がある。世の中には現にこんな話さへあるでは無いか。この話があなた今誰の身の上と思つて居られる、とこんなこと迄申したのである。あとで聞くと側で聞いて居た人が、皆なハラ／＼も、其方なれば私の前に頭を下げ、最後迄聞いて下さることを知つて居るから、言へたのである。處が案外それが當つたのであります。

五八 そこで皆さんに、肝腎の處は私共は不實であるが、其の不實を哀はれと言つて下さるのだ丈けで止つて居つては何にもならぬのである。私共の其の不實が可哀相で、最後迄其者が捨てられぬのが佛の廣大のお姿なれば、今迄の不實が實に申譯けなき根本と、なるからこそ、今更歸へれるか歸もこれ一つは何うか頂いて下され」とある、却つて死にゆく人が、然うなる自分に夫れを頂いて呉れとの心となる。然ういふと誰しも夫れぢやとて人生の別れぢや悲しいは仕やうがないとなるのであるが、だゞ然ういふて悲むばかりであるのはまだ然ういふ自分に對する向ふの言うて呉れることが分らぬからぢや。處が斯く言ひて自分の方は不實に過ぎ去つて居る其の私の不實の様が彌々可哀相で捨てられぬが佛の御眞實と、此の飽く迄お見捨てなきお心を聞く時は、遂に如何な私にも謝り果て、眞實にならずに居られぬが、遂に私が眞實になる迄眞實に仕て下さる佛の御眞實である。之が實に眞宗の俗諦門の出て來る根源なのである。之なればこそ

罪障功德の體となる、氷とみづの如くにて、

氷おほきにみづおほし、 さはりおほきに徳おほし。

茲一つが肝腎なのであります。

六一 て茲を話したら、今の御婦人もとうとう分つて下された。さればとて實際上歸へれる事情が開けて來るや否やは分らぬも、歸れる歸れぬに係はらず、心の方が之で開けて來た。夫れ迄にすれば、第一に歸へる氣が無くなつて居られたのである。氣が無いのは佛のお慈悲を、そらして聞いて居られたからである。處がひと度び茲が分つて來ると、先きいふ皆んな向ふ側になつて辯護せらるゝ程、夫れ程世間上の理屈には當んでる事情なるに係はらず、世間の理屈は信仰上の理屈にならぬ。設へ世間萬人がよいと言つて呉れても、自分がすまぬから、即ち今迄結局自分の我儘を立て通した爲め色々の事情になつてたのであるが、然ういふ不實を飽く迄お見捨てなき廣

大の眞實に遇ひ、目が醒めたから、我が不實なりて居られぬやうになつたから、自分の方から謝りて歸へらうといふ氣にもなつて來たのである。てひと度びこのお見捨てなき御眞實なることに氣がついて來られると、もうあとは言はなくてもよい。夫れ程喧ましく言うて置きながら、一言「分りました」と言はるゝなり、私はもう何も言やせぬのである。後に福岡に參つた時此の話を仕たら、果して信仰上非常なる動搖を興へた。後には門司迄ついて來て聞かれた人が出來て來た程である。果して信仰が徹して居るか否や、茲が最も大切なる處である。

人生に眞實の立場が出來てくる

六二 又福岡では斯ういふことがあつたのであります。或る醫師の方で非常な理想家の方が慈善病院を開き、醫界の弊風を挽める目的で熱心に經營して居られた。處が考は善きも中々其の通りにはゆかぬ。五人共同してやつて居られたのであるが、矛盾が出來て來て仕やうがない。もう今迄やつて居たことが彌々いかぬから、何うしたらよいか。人のすることも自分のすること皆な偽はり分つて、もう何とも仕て見やうが無い、何うするかと實地の問題につきてのお尋ねである。これが大變よい問題なのである。

六三 茲で大低は、可かぬとなると、「爾らば止める」といふ解決になり易いのである。之なら皆んなが大變やりよいのである。併し私は然うは言はなかつた。假りに止めるとすると直ぐ又次ぎにあなたのなさる仕事は何になるか、矢張り不實で仕やうがないかと申したのである。爾らば矢張り今

迄通りの事業を繼續するとするか、夫れでは不實々々と言ひつゝ、猶ほ不實を續けることになる。大低の人が皆な此のどちらかになりてある。今迄はやりそこなつたから、此の次ぎは、これになつてあるか、何れ仕やうしてもいかぬものはいかぬのだからと、何時迄もいかぬ事に腰掛けて居るか、此の何ちらかになりて居る。

六四 其處で私は申したのであります。「今あなた不實でいかぬからと、止められても矢張り不實である。又不實でも仕方が無いと、續けられると猶ほ不實である。即ち行くも死せん、住まるも死せぬ、一種として死を免れずである。然るに何うかといふに、今茲に其の飽く迄不實極る者に、其の不實極るが可哀相で、飽く迄捨てられぬとある佛の眞實がましますといふ此の一事である。私の方はどこ迄も不實だらけ、其の不實だらけが如何にも可哀相で捨てられぬ思召が佛の御眞實である。「イヤ何れ仕やうが捨てられぬと仰せられても、不實は矢張り不實故仕方がない」と言へば、其の不實が可哀相故猶ほのこと捨てられぬとある佛の御眞實である爲めに、遂に如何に不實の私も、不實を續けやうとしても最早や續けられなくなり、謝り果て、其の御眞實を頂く一念に、茲に初めて人生に眞實の立場が出來るのである。といふ此の事をお話致したのである。

六五 これは私共は實にこれ程不實な有様なのである。往くも死し、住まるも死し、歸るも死し、止めても不實なれば、其の儘に仕て置いても不實である。何ちら仕ても不實より脱れられぬ、何とも仕て見やうなき私共である、然るに佛は其

時

報

求道學舎第二求道會 講話概況

求道學舎

(聽講 甲記)

六月七日 快晴。暑氣甚し。信疑の得失」と願して講じらるゝ。先づ信疑とは世間普通に通ずる疑ふと云ふ如きとは異なり、如來の慈悲に夜が明けたるを信といひ、未だ夜の明けぬを疑と名く、信疑は恰も道分の如く、其の境目に立てられたる道標は佛智不思議といふことなり、と述べられ、進んで最近一月計り、世人の尋常問題に關し、種々の方策を立て、又一般の宗教家が之れに應じて今更の如く信仰を鼓吹せざるべからずなど説くを聞き、如何にももどかしく何となく胸裏にたれ心地せりとて、我々がどうしたらよい、こうしたらよいと方法がある程ならば佛智不思議は、人間には方法は一つもなし、我々は飽く迄罪業深重にして、なすべき事が一つも出來ぬ、さればこそ本願の御力が加はつて下さるのであると、人生の眞趣を説かるゝこと極めて懇切丁寧なりき(前號社説參照)

六月十四日 小雨後晴。講題は「本願の不思議なり、本願の不思議といふこととは信仰の味の上に於て最も大切な事である。私共が一面から云へばよくせればならぬ、悪しき事はいかんか云ふが世間普通の教なり。しかるに今善が出來ぬ、惡が止まらぬとなると、どうしても當前以外に其善の出來ぬ所を講み、惡の止まらぬものを御見捨てなき如來の御慈悲が現はれてこればならぬ。これが即ち本願の不思議である。そこで近頃殊に味はせて居るのは、歎異抄第十三章の「彌陀の本願不思議におほしませばとて、惡を恐れざるはまた本願は、こりて往生かなふべからずといふこと、この條本願を疑ふ善惡の宿業をこゝろえざるなり」の御文である、茲で最も肝要なるは惡を恐れずと云ふこと、之れは惡くてもよいと云ふ意味ではない、一體惡くてもよいと云ふのは、未だ眞實に自分の惡しき事を自覺したるに於ては、眞實自分の惡しき事に氣が附きて、しかも其惡しきものを飽く迄見捨て給はぬ本願の不思議を聞き、最早其惡しき事が毫も氣に懸らず、心配にならぬ様になつたのが、所謂「彌陀の本願不思議におほしませばとて惡をも恐るべからず」の正意なりと述べらる(前號講話參照)

の不實を哀はれとのお慈悲であるからと、其の不實の儘で謝り果てゝるは、不實の看板をかけて安心仕て居るものに過ぎ無いのである。處が然ういふて私共が徹頭徹尾不實に仕て居る、其の不實の様に目をつけられて、飽く迄其の不實にお呆れなく、最後迄眞實に仕て下さる佛の御眞實と、之に一念氣がついて來た時は、茲に初めて徹底味、決定味は之から出て來るのである。初めに申した『華嚴經』の「此の法を聞いて信心歡喜して疑ひ無き者は、速に無上道をならん。諸の如來と等しとなり」の味ひは、茲から出て來るのであります。

六六 て斯く之れ程徹頭徹尾不實の私を、之を捨て、下さるぬのが、實に大悲の眞實である、と一念茲に夜を明けさせて貰ふと、其の廣大の仰せを遠うから聞かせにあひながら今日迄うか／＼して、彌々御手数をかけさせて居た惡しさが、彌々私の悪い處である。斯く徹頭徹尾私不實なばかりに五劫永劫の御苦勞をさせ奉り、夫れ程御心配かけさせれば、全く私の此の不實一つの爲めとなると、今迄世間が不實であるの、自分が何うもならぬのと、世間を當てにし、自分を何うにかなるものゝやうに思つて居つたのが抑々根本の間違ひであつた。爾るに此の不實我慢の私の根性を見て下されたばかりに夫をお見捨てなく長々の御心勞と、之れに腹ふくらせて貰うと、あゝ能くも／＼是れ程しぶととき、之れ程不實な私である爲めに、態々現はれ下されたる爲物身、實相身の佛の御姿かと、初めて其の廣大の御眞實の前に我慢が折れて、私の不實が不實の儘で最早や通うされなくなる。茲が始めて人生に於て如來の眞實に打あかさされ、頭の下つた味なのである。以上は大分複雑した事を、く／＼申したのであるけれども、今度は茲一つに力を入れ、到る處で喜ばせて貰うて來たのであります。(已上)

近角常觀著

懺悔錄 附錄「歎異鈔」

第八版 定價 二十錢
袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金料玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人救濟の眞意を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と其後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇傾に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ「懺悔錄」の名ある所以にして一讀入信の人少からず。

人生と信仰

第五版 定價 卅錢
袖珍美本

●第一章 人生問題と信仰
●第二章 悲觀思想と信仰
●第三章 倫理力行と信仰
●第四章 犯罪心理と信仰
●第五章 社會問題と信仰
●第六章 國家秩序と信仰
●第七章 世界宇宙と信仰
●第八章 倫理力行と信仰
●第九章 國家秩序と信仰
●第十章 倫理力行と信仰
●第十一章 國家秩序と信仰
●第十二章 倫理力行と信仰
●第十三章 國家秩序と信仰
●第十四章 倫理力行と信仰
●第十五章 國家秩序と信仰
●第十六章 倫理力行と信仰
●第十七章 國家秩序と信仰
●第十八章 倫理力行と信仰
●第十九章 國家秩序と信仰
●第二十章 倫理力行と信仰
●第二十一章 國家秩序と信仰
●第二十二章 倫理力行と信仰
●第二十三章 國家秩序と信仰
●第二十四章 倫理力行と信仰
●第二十五章 國家秩序と信仰
●第二十六章 倫理力行と信仰
●第二十七章 國家秩序と信仰
●第二十八章 倫理力行と信仰
●第二十九章 國家秩序と信仰
●第三十章 倫理力行と信仰
●第三十一章 國家秩序と信仰
●第三十二章 倫理力行と信仰
●第三十三章 國家秩序と信仰
●第三十四章 倫理力行と信仰
●第三十五章 國家秩序と信仰
●第三十六章 倫理力行と信仰
●第三十七章 國家秩序と信仰
●第三十八章 倫理力行と信仰
●第三十九章 國家秩序と信仰
●第四十章 倫理力行と信仰
●第四十一章 國家秩序と信仰
●第四十二章 倫理力行と信仰
●第四十三章 國家秩序と信仰
●第四十四章 倫理力行と信仰
●第四十五章 國家秩序と信仰
●第四十六章 倫理力行と信仰
●第四十七章 國家秩序と信仰
●第四十八章 倫理力行と信仰
●第四十九章 國家秩序と信仰
●第五十章 倫理力行と信仰
●第五十一章 國家秩序と信仰
●第五十二章 倫理力行と信仰
●第五十三章 國家秩序と信仰
●第五十四章 倫理力行と信仰
●第五十五章 國家秩序と信仰
●第五十六章 倫理力行と信仰
●第五十七章 國家秩序と信仰
●第五十八章 倫理力行と信仰
●第五十九章 國家秩序と信仰
●第六十章 倫理力行と信仰
●第六十一章 國家秩序と信仰
●第六十二章 倫理力行と信仰
●第六十三章 國家秩序と信仰
●第六十四章 倫理力行と信仰
●第六十五章 國家秩序と信仰
●第六十六章 倫理力行と信仰
●第六十七章 國家秩序と信仰
●第六十八章 倫理力行と信仰
●第六十九章 國家秩序と信仰
●第七十章 倫理力行と信仰
●第七十一章 國家秩序と信仰
●第七十二章 倫理力行と信仰
●第七十三章 國家秩序と信仰
●第七十四章 倫理力行と信仰
●第七十五章 國家秩序と信仰
●第七十六章 倫理力行と信仰
●第七十七章 國家秩序と信仰
●第七十八章 倫理力行と信仰
●第七十九章 國家秩序と信仰
●第八十章 倫理力行と信仰
●第八十一章 國家秩序と信仰
●第八十二章 倫理力行と信仰
●第八十三章 國家秩序と信仰
●第八十四章 倫理力行と信仰
●第八十五章 國家秩序と信仰
●第八十六章 倫理力行と信仰
●第八十七章 國家秩序と信仰
●第八十八章 倫理力行と信仰
●第八十九章 國家秩序と信仰
●第九十章 倫理力行と信仰
●第九十一章 國家秩序と信仰
●第九十二章 倫理力行と信仰
●第九十三章 國家秩序と信仰
●第九十四章 倫理力行と信仰
●第九十五章 國家秩序と信仰
●第九十六章 倫理力行と信仰
●第九十七章 國家秩序と信仰
●第九十八章 倫理力行と信仰
●第九十九章 國家秩序と信仰
●第一百章 倫理力行と信仰

發行所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所